

一 博多遺跡群第138次調査報告書 -



2 0 0 4

福岡市教育委員会



一 博多遺跡群第138次調査報告書 -



2 0 0 4

福岡市教育委員会

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が多く残されており、これを 後世に伝え残していくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の都市部周辺における開発事業の増加に伴い、止むを 得ず失われていく埋蔵文化財の発掘調査を実施し、失われていく遺跡の記録保存に 努めているところであります。

本書は、博多遺跡群第138次調査の成果を報告するものであります。本調査では古墳時代から中世にかけての集落遺跡の一部を調査し、博多遺跡群の全容を知る上での多くの貴重な成果をあげることができました。本書が、市民の皆様の文化財に対する理解を深めていく上で活用されると共に、学術研究の分野でも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、費用負担をはじめと する御協力を賜りました株式会社ジャパン精光サンライズエステートの皆様をはじ め、多くの方々のご協力とご理解に対し、心からの謝意を表します。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会 教育長 生田 征生

例 言

- 1. 本書は、博多区冷泉町35・36・37おける共同住宅建設工事に先立って、福岡市区教育委員会が平成14年度(2002年度)に実施した博多遺跡群第138次調査の発掘調査報告書である。
- 2. 本書の執筆・編集には本田浩二郎があたった。
- 3. 本書に使用した遺構実測図・遺物実測図は本田が作成し、製図した。
- 4. 本書の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北であり、真北より6°40′ 西偏している。 なお、本書に使用している座標は、国土座標第2系を用いている。
- 5. 遺物実測図の縮尺は1/3・1/6に、銅銭は1/1の縮尺に統一した。
- 6. 検出した遺構については、調査時に検出順に通し番号を付した。
- 7. 本調査で出土した銅銭は、大庭智子が錆落とし・判読し、拓本を作成した。なお、銅銭の一部は 福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎が複製を作成し、判読を行った。
- 8. 本書で使用した写真は本田が撮影した。
- 9. 本調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定であるので、活用されたい。

本文目次

博多遺跡の立地と環境				
-	はじめに			
(一)	調査にいたる経緯	3		
(_)	調査体制	3		
第二章	発掘調査の記録	4		
(一)	調査の概要	4		
(二)	基本層序	5		
(三)	遺構と遺物	6		
	1. 住居	10		
	2. 土坑•井戸	12		
	3. 溝状遺構	28		
	4. その他の出土遺物	38		
	a. 遺構出土遺物	38		
	b. 包含層出土遺物 ······	38		
	c. 銅銭 ···································	44		
	d. 墨書土器	47		
第三章	まとめ	50		

表紙 墨書土器 馬 裏表紙 墨書土器

博多遺跡の立地と環境

博多遺跡は、中世都市「博多」を主として、弥生時代から近世、さらに現代まで続く複合遺跡である。地理的には、玄界灘に面する博多湾岸に形成された砂丘上に位置し、西を博多川(那珂川)、東には江戸時代に開鑿された石堂川(御笠川)、南は石堂川開鑿以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川(御笠川)によって画されている。

博多遺跡群での遺構の初現は弥生時代中期前半の集落・甕棺墓である。集落・甕棺墓群は後期以降 も存続するが、周辺に可耕地を持たない砂丘上に忽然と出現する博多遺跡群は、奴国の海上活動を支 える拠点集落の一つとして理解することができる。

古墳時代にはいると砂丘面上に集落が広範囲に展開し集住が始まり、前方後円墳(博多1号墳)や 方形周溝墓などが出現する。5世紀代には集落は縮小し、墳墓のみが点在する傾向を見せるが、6世 紀代には竪穴住居の検出数は増加し、集落は再び盛行を見せる。

律令時代にはいると、御笠川の最上流地域に大宰府が設置され、九州の政治・軍事的中心地となる。また、博多湾岸には、博多遺跡群と入り海ひとつ隔てた西の丘陵上に、対外交渉の拠点として鴻臚館が置かれた。博多遺跡群内に官衙そのものが設置されたという文献記録はないが、石帯・銅製帯金具・墨書須恵器・須恵器硯・皇朝銭・鴻臚館式瓦・老司式瓦などの特殊な遺物が出土し、東西・南北方向の溝が方一町の規格性をもって掘削されることから、律令官人とそれに伴う支所施設等の存在が推定される。平安時代後期になり律令体制が弛緩すると、対外貿易に管理も中央政府の直接的な管理・掌握から、大宰府を通じての管理に変質し、大宰府官人による蓄財のための私貿易の拡大をもたらす。このような時勢の流れの中で、11世紀に入り博多において宋商人の居留が本格的に始まる。博多遺跡群が本格的に繁栄・展開するのは11世紀後半に入ってからで、埋め立てによる居住域の拡大が開始され、該期の膨大な量の輸入貿易陶磁器などがこれまでに出土しており流通形態が確立した時期と考えられている。さらに、12世紀末から13世紀前半にかけて、聖福寺・承天寺が博多在住の宋商人綱首の援助のもとに、相次いで建立され、周辺の都市化が急速に進行し、筥崎宮周辺に展開する箱崎遺跡群と共に中世都市群として発展していくことが現在までの調査成果から分かっている。

鎌倉時代には、二度にわたる元寇で博多付近一帯は戦場となり一旦は荒廃するが、13世紀末には鎮西探題が博多に設置され、博多は貿易の中心地だけでなく、九州の政治的中心地という役割を持つようになる。調査成果から13世紀末から14世紀初めにかけて、道路遺構が各調査地点で確認されており、それらは戦国期まで存続することが分かっている。これらの道路は必ずしも統一された規則性を持つわけではないが、中世後半を通じての博多の都市景観はここに確立されたといえよう。

室町時代後半の博多は堺と並んで自治都市として有名であったが、度重なる兵火によって焼亡している。1586年には中国の毛利氏の軍と対峙した薩摩の島津氏によって焼かれ灰燼と帰する。しかし、翌年には豊臣秀吉によって復興される。これが太閤町割であり、この時点で鎌倉時代以降続いていた博多の街区・道路は廃止され、博多全体は長方形街区と短冊形地割で仕切られた。こうして、中世都市博多は近世都市博多として再生された。しかし、江戸時代に入り、鎖国政策がとられ、貿易都市としての博多は幕を下ろし、商人町博多として明治維新を迎えたのである。

昭和52年の高速鉄道の調査より始まった博多遺跡群の発掘調査は、平成16年3月現在、第146次調査(地下鉄・築港線を含めると181次)を数える。大規模な開発から小規模な開発へと転換期を迎えているが、中世都市「博多」は破壊と引き換えに当時の様相を着実に明らかにしつつある。

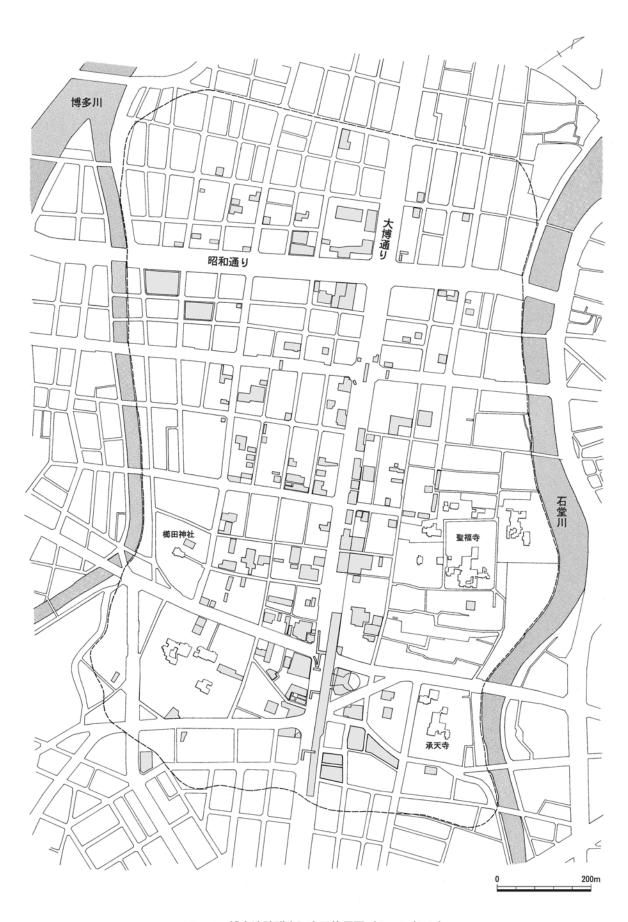


Fig. 1 博多遺跡群内調査区位置図(S=1/8000)

第一章 はじめに

(一) 調査にいたる経緯

平成13年10月30日、株式会社ジャパン精光サンライズェステートより福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、博多区冷泉町35・36・37における共同住宅建設予定地内に関しての埋蔵文化財事前審査願が提出された。申請地は周知の遺跡である博多遺跡群の南東側に位置しており、申請地の隣接地では数次の発掘調査が行われており、良好に遺構が存在していることが推測された。これを受けて埋蔵文化財課は平成13年12月6日に現地での試掘調査を行った。その結果、現地表面から150cmほど掘り下げた暗灰褐色土層面上において中世から近世にかけての溝状遺構、柱穴、土坑などの遺構と該期の遺物の存在を確認した。これらの遺構は濃密に遺存しており、建設工事に伴う基礎工事によって遺跡の破壊は免れないため、工事によって止むを得ず破壊される部分については全面に発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、平成14年6月3日に着手し、同年8月23日に終了した。

(二) 調査体制

調査委託	株式会社ジャパン	精光サンライス	ズエステート	代表取締役	: 柳 三	斗烈
調査主体	福岡市教育委員会	教育長			生田	征生
調査総括	同	埋蔵文化即	対課 課長		山崎	純男
	同	埋蔵文化則	対課 第2係長	ŧ	田中	壽夫
調査庶務	同	文化財整備			御手游	先 清
調査担当	同	埋蔵文化即	才課 事前審查	至係	大塚	紀宜
					田上	勇一郎(試掘調査)
			第2係		本田	浩二郎(本調査)
調査作業	阿部 幸子 池	聖子	大音 輝子	小池	温子	
	小路丸嘉人	路丸良江	永田 優子	永田	侓子	

小路丸嘉人 小路丸良江 永田 優子 永田 侓子 夏秋 弘子 寺園恵美子 増田ゆかり 吉川 暢子 金子二三枝 幸田 信乃 塚本よし子 薗部 保寿

中野 裕子

能登原孝道(九州大学)

整理作業 有島 美江 室 以佐子 鳥尾 安子

遺跡調査番号	0 2 2 0	遺跡略号	H K T 138
調査地地番	博多区冷泉町35・36・37	分布地図番号	千代•博多48
開発面積	384.91 m²	調査面積	271.85 m²
調査期間	2002. 06. 03~2002. 08. 23	調査原因	共同住宅建設

調査期間中には多田建設株式会社の方々に多くの配慮を賜った。記して感謝申し上げる次第である。 また福岡市教育委員会埋蔵文化財課の同僚諸氏からは多くの助言を頂いた。深く感謝する。

第二章 発掘調査の記録

(一)調査の概要

博多遺跡群は、福岡平野の博多湾岸に位置し、那珂川と御笠川(石堂川)の河口に挟まれた三角州平野上に形成された遺跡群である。博多遺跡群の立地する砂丘地形は、南から大きく「博多浜」と「息浜」(おきのはま)の二つに分けられる。現在の「博多」の街並みは、この砂丘地形上に人工的な整地層が2m程度盛り土されて形成されたものであるが、現状でも埋没した旧地形の起伏を比較的よく反映していることがことが、これまでの調査成果より判明している。

今回報告を行う、博多遺跡群第138次調査地点は遺跡範囲の南東側に位置しており(Fig-1)、調査区の現状は宅地・駐車場であった。発掘作業は調査対象地が南北方向に狭長な地形であったため、北側と南側の2地点に分けて行った。調査作業の工程上、北側の調査区を1区、南側調査区を2区と設定し、1区の調査より着手した。1区は第一面で11m×12m程度の方形な調査区となり、2区は4m×24m程度の面積について調査を行った。

試掘調査では現地表面から140cmほど掘り下げた暗灰褐色土層面上で遺構が検出されており、これに基づいて調査着手以前に近代から現代の整地層を調査区外に搬出し、重機による表土掘削を開始した。調査地点の現地表面の標高は5.20m前後を測る。

調査では、古墳時代前期の竪穴住居の一部を初現として、古代の区画溝、中世の廃棄土坑群、溝状 遺構、井戸遺構、不定形土坑、柱穴群などの遺構を検出した。

遺物は弥生土器、古式土師器、須恵器、土師器、緑釉陶器、瓦器、貿易陶磁器、国産陶器、銅銭、 獣骨、金属製品などがコンテナケース240箱分が出土している。

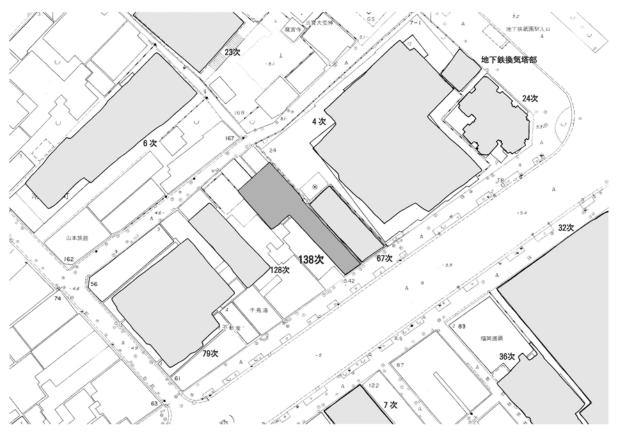


Fig. 2 調査区位置図(S=1/1000)

(二) 基本層序 (Fig. 3-1)

第138次調査地点は、博多遺跡群が立地する砂丘の南側列上に位置している。この砂丘は縄文時代中期以降に形成されたものであり、博多遺跡群の一般的な基盤層となる黄褐色砂層面が上層部分に堆積する。調査では標高2.5~3.5m前後の高さで、遺跡群の基盤層である黄褐色砂層が北側に緩く傾斜した状態で検出される。

これまでに行われた周辺の調査成果により、本調査区北側に接する通称「国体道路」付近に南側砂丘列の頂部が位置していることが推測されている。調査区内では基盤層である砂丘面は北側に向かって緩やかな傾斜をみせることから、本調査地点は砂丘北側緩斜面上に位置していたことが推測される。調査着手以前の現地表面の観察においても北側への緩やかな傾斜が見られ、その高低差は30cm前後を測る。また、調査区北側50m地点で行われた第105次調査は砂丘を画する鞍部上に位置し、最下層の河成砂層面上(標高2.0~2.1m)で中世前半期に属する廃棄遺構が検出される。砂丘鞍部は西側より湾入する谷地形となり、東側で連接する。砂丘北側は本調査地点2区の南側から緩やかに鞍部低位面へ傾斜する地形であることが土層観察より伺える。

本調査地点は調査以前宅地であったことから、大規模な攪乱を受けておらず、比較的良好な状態で遺構は遺存していた。南側では以前の建物の地下基礎が残存していたため、その部分のみ調査を行っていない。現地表面の標高は5.4~5.1m前後を測る。試掘成果に基づいて標高4m前後の黄灰褐色土の整地面上で遺構面を設定した。報告を行う各遺構面の間には複数の整地面が確認されたが、調査では主要な遺構の検出が予想された1~3面の遺構面を設定し、各整地面は土層断面上で記録するに留めた。整地は黄灰褐色土・灰黄色土・黄褐色土などを使用して、厚さ5~10cm前後の単位で行われていた。整地層は北側の1区で主に検出され、2区では北側の一部で検出されただけである。



Ph. 1 調査区土層断面(南から)



Ph. 3 調査区土層断面(南西から)



Ph. 2 調査区土層断面(西から)



Ph. 4 調査区土層断面(北西から)

(三) 遺構と遺物

以下に各遺構面と検出された遺構についての説明を行う。

a. 第1面の調査 (Fig. 3-2)

1区では標高3.80~3.90m付近で検出される黄灰褐色土の整地層面上で設定した遺構面である。試掘の成果を基に表土掘削を行い、標高4.10m前後の灰褐色土層面(Ph. 11)で遺構検出を行ったが、遺構の掘り込みを伴わない近世の整地層であったため、再度20cm前後の掘り下げを行い、遺構面の検出を行った。1区第1面とした遺構面で検出された遺構は、南北方向の主軸を持つSD-001や東西方向の主軸に持つSD-006・SX-050などの溝遺構や円形の廃棄土坑(SK-002・SK-029等)等が検出された。井戸遺構は近世以降の瓦井戸などが数基ほど検出されたが、中世に属する井戸遺構は検出されなかった。1区第1面の調査は10.5m×12mの面積で行った。

第1面での遺構検出は黄灰褐色土の整地層面(1面-1)を鍵層として行ったが、1区南側では黄灰褐色土整地土層面は検出されず、部分的に下層の整地層面を検出してしまい、その整地面上において遺構検出・掘り下げを行った。その結果、1区第1面の調査においては、三時期の遺構面の調査を同時に行っていることになる。下層の整地層面はそれぞれ標高 $3.60\sim3.70$ m前後の灰黄色土層面(1面-2)、標高 $3.30\sim3.60$ m前後の黄褐色土層面(1面-3)となる。前述のように、整地は $5\sim10$ cm前後の単位で行われており、永続的に居住用地として使用されたことが伺われる。

2 区南側では黄灰褐色土の整地層が面的に検出されなかったため、1 区と標高を揃えた3.90m前後の暗褐色砂層面上で遺構検出を行った。2 区北側では1 区と同様に、黄灰褐色土の整地土層面上で遺構検出を行い、SK-351などの廃棄土坑などを検出した。南側の暗褐色砂層面直上には1 区で確認された灰褐色土層(標高4.10m前後)が堆積するが、近世の包含層であるため遺構検出は行っていない。調査区全体が北側に緩く傾斜しており、北側の低位面との比高差を解消し居住域の拡大を行うために、1 区に整地土による埋め立てが集中して行われたものと考えられる。検出された遺構には、円形の廃棄土坑(SK-342・SK-344等)や溝遺構(SD-392)、井戸遺構(SE-379・SE-394)などがある。井戸遺構は調査ではわずかに2 基のみが検出されたが、掘方の一部が調査区にかかるのみで、井筒などの主体部は調査区外に位置するため、時期は比定しがたい。また、調査区の壁面保護と安全確保のため、井戸掘方の完掘は行っていない。2 区第1面は4 m×24mのトレンチ状の範囲で行った。

第1面の年代は検出遺構より、中世前半代から中頃の時期が考えられる。

b. 第2面の調査 (Fig. 4-1)

標高2.8~3.2m前後の暗褐色砂層面上で設定した遺構面である。1区第2面では土坑・柱穴群・溝 遺構などの遺構を検出した。排土処理や調査区壁面養生のため、調査は第1面よりも範囲を狭め、9 m×9mの面積で行った。検出された土坑などの遺構は暗褐色砂層上に堆積する黄褐色砂質土層上から掘り込まれたものが多く、遺構自体は中世前半代の時期のものが多い。安全対策上の理由から第1面で完掘できなかった遺構(SK-029・SX-050)などの掘り下げも行った。

第2面で検出された溝遺構(SD-174・SD-186)は2区や周辺の調査区(第127次調査等)においても検出されており、区画溝の用途が考えられる。この溝遺構の北側には、直交または平行する主軸で建てられた掘立柱建物や柱穴列などが図上で数棟復元できる。

2区では博多遺跡群の基盤層である黄褐色砂層面上で検出を行った。検出した遺構は古墳時代前期の竪穴住居・中世前半期の土坑・古代末の溝遺構などがある。前述したように2区中央部には地下室

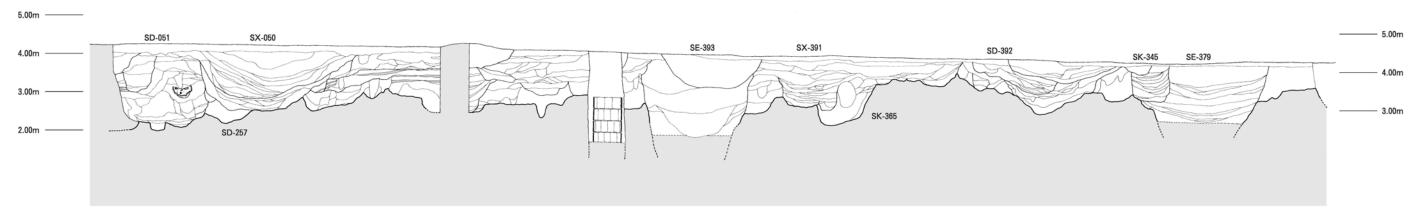
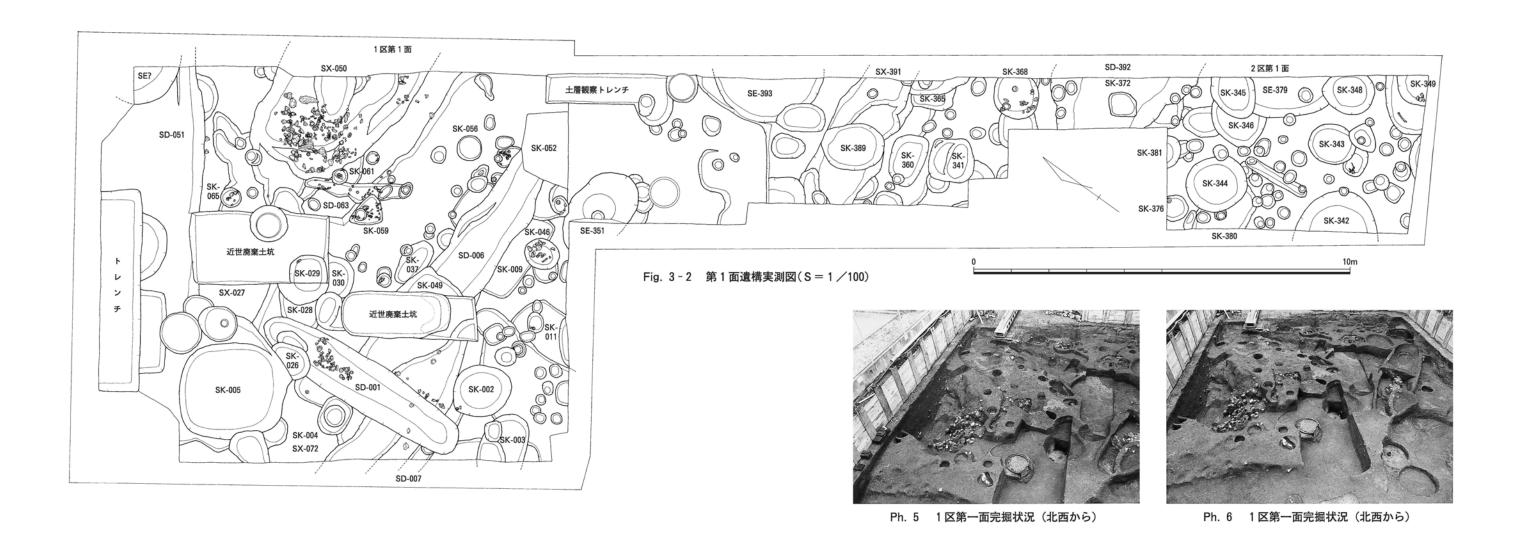
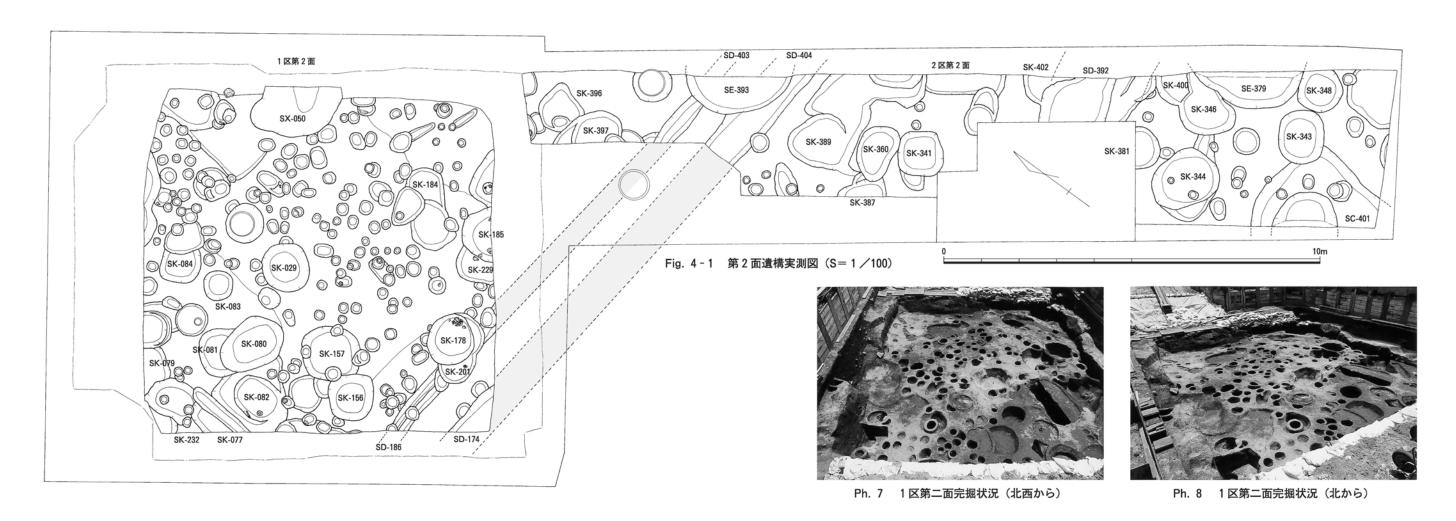
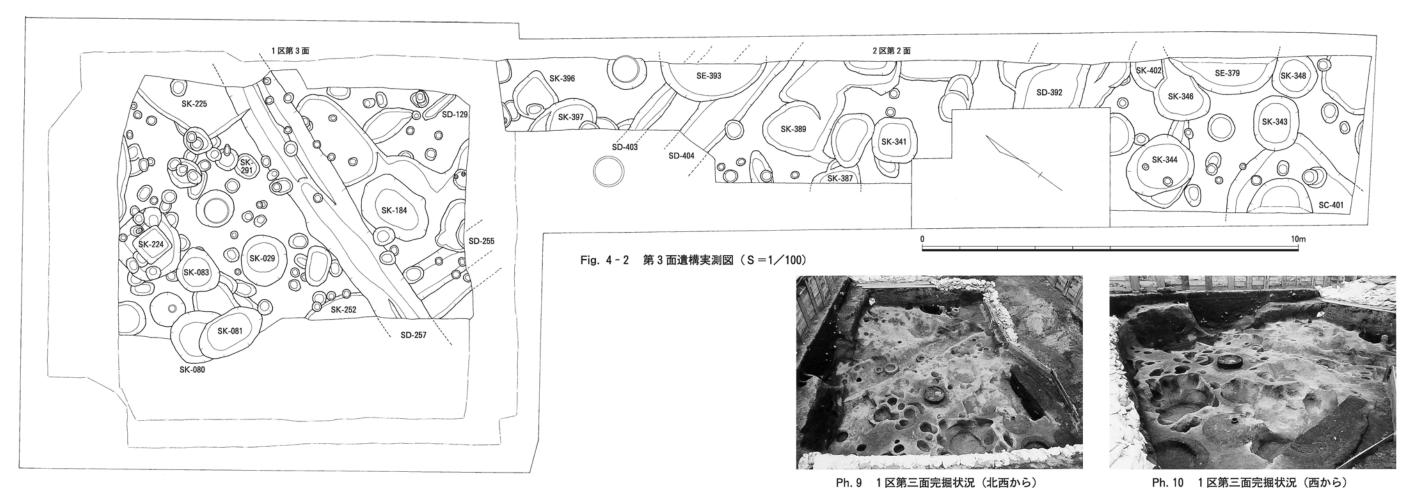


Fig. 3-1 調査区北東壁土層図(S=1/100)







のコンクリート基礎が撤去されないまま残存していたため、その部分については調査は行っていない。 土層面では1区第3面に相当する遺構面であるが、検出された遺構の内容や土層堆積状況などから 1区第2面に対応する遺構面であったため、第2面として調査・報告を行った。

2 区第 2 面とした黄褐色砂層面の遺構面は北側に緩く傾斜しており、 2 区の南端と北端では50cm 前後の比高差を測る。また、 2 区第 1 面から第 2 面への掘り下げ時には、暗褐色砂層中から弥生土器・ 須恵器・古式土師器・白磁碗・瓦器椀などの遺物が出土した。

遺構面自体の年代は、古墳時代前期と古代末の時期であるが、検出された遺構の多くは中世前半の時期に属するものが多い。

c. 第3面の調査(Fig.4-2)

標高2.2~2.7m前後で検出される黄褐色砂層面上で設定した遺構面である。緩やかに北側に傾斜する遺構面で1区のみで設定した。排土処理と安全対策から7m×8mの範囲で調査を行った。

第3面で新たに検出された遺構には土坑・柱穴・溝遺構などがある。土坑としては、円形土坑中に 方形土坑が掘り込まれたSK-244などが検出された。溝遺構はSD-255・SD-257等を検出した。SD-255は第2面で検出されたSD-186よりやや東に振れる主軸を採る溝で、SD-257と直交する。東西・ 南北方向の整然とした区画溝が整備される以前に使用された区画溝と考えられる。

第3面とした遺構面の年代は古代後半の時期が考えられる。

各区・各遺構面への掘り下げ時には、検出できなかった遺構面・遺構埋土から遺物が大量に出土した。これらの遺物は包含層出土遺物の項において報告を行う。





Ph. 13 2区第二面完掘状況(東から)



Ph. 12 2区第一面完掘状況(北西から)



Ph. 14 2区第二面完掘状況(北西から)

第138次調査では、住居・土坑・井戸・溝状遺構・柱穴群などの遺構が多数検出された。以下に各 遺構面で検出された主要な遺構とその出土遺物についての説明を行う。

1. 住居

SC-401 (Fig-5)

2区2面の南側隅部で検出された遺構である。南北長3.0m×東西長2.5m分が調査区内で検出されたが、遺構全体の規模は確認できなかった。検出された部分の中央部を中世廃棄土坑であるSK-342に切られる。検出面の標高は3.40m前後を測り、平面形・壁面の立ち上がりなどから竪穴住居の一部と考えた。現状から推測される住居の平面形は方形で、住居床面はほぼ平坦となり、調査区内では炉



Ph. 15 SC-401完掘状況(南から)

などの付随する施設は検出されなかった。検出 面から住居床面までは40cm前後の深さで残存する。 博多遺跡の基盤層である黄褐色砂層面上で検出 され、埋土は暗褐色砂が主体となる。床面直上 には焼土が含まれた暗黄褐色砂が堆積する。

住居床面上では直径30~50cm前後の柱穴が検出される。床面から柱穴底面までは深さ60~70cmを測る。遺物は埋土中より古式土師器壺・器台などが比較的まとまった量で出土した。

出土遺物をFig-6に示した。

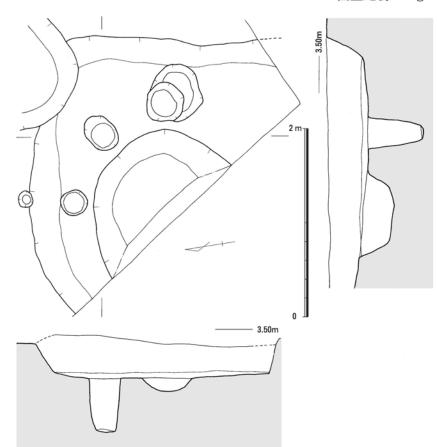


Fig. 5 SC-401実測図(S=1/40)

1は古式土師器の小型器台である。口径9.8cmを測り、脚部は接合部より欠損する。外器面には横位の密なヘラ磨きが施される。内器面見込み部には放射状のヘラ磨きが施され、体部はナデ調整される。焼成は良好で、色調は暗橙色を呈する。

2は古式土師器小壺の口縁 部である。3・4は古式土師 器壺の口縁部である。5は土 師器甕の口縁部である。口縁 端部はナデ調整により面取さ れる。体部には刷毛目調整が 施され、内器面にはやや幅の 広い刷毛目調整が施される。

6・7は古式土師器壺の頸部片である。6は色調が褐色を呈し、頸部径12.8cmを測る。 内器面にはナデ調整が残り、 口縁部に向かう刷毛目調整が施される。8・9は古式土師器壺である。8は口径16.6cm、頸部径12.4cmを測る。外器面は刷毛目調整が施される。頸部付近はナデ調整によって刷毛目調整がナデ消される。口縁端部には段を有する。内器面は頸部付近に指頭圧痕が残り、体部にはヘラ削りで調整される。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。9は口径18.8cm、頸部径14.2cm、胴部最大径23.8cmを測る。外器面には密な刷毛目調整が施され、口縁部はナデ調整が施される。内器面はナデ調整上にヘラ削りが施され、器厚は3~4 m前後を測る。10は二重口縁壺である。口縁部は中程より欠損する。外器面は体部下半で刷毛目調整が施され、上半部は密なヘラ磨きが施される。内器面には粘土紐の接合痕が残る。頸部上には横位の刷毛目調整が施される。これらの遺物より、この住居の年代は4世紀代と考えられる。

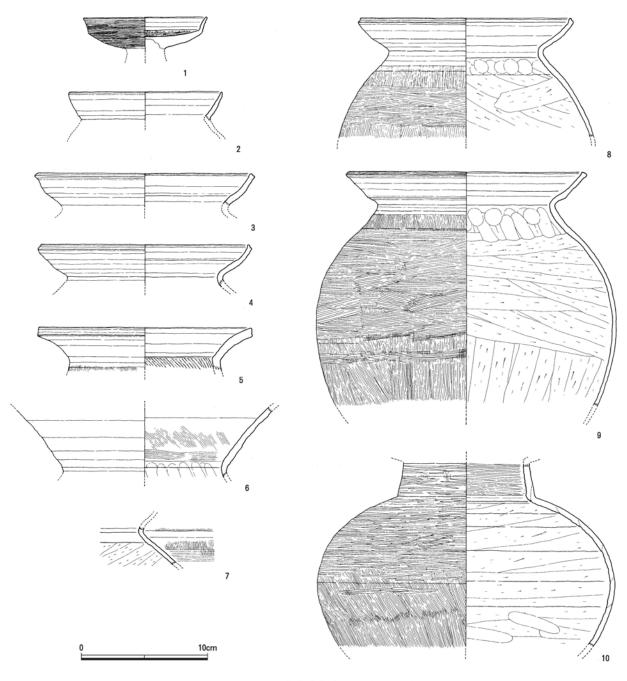


Fig. 6 SC-401出土遺物実測図(S=1/3)

2. 土坑・井戸

SK-002 (Fig-7)

1区1面南側で検出された円形の廃棄土坑である。検出面は黄灰褐色土の整地面上で、標高は3.90 m前後を測る。土坑の直径は1.35~1.55m、検出面から土坑底面までは45cm前後の深さを測る。埋土は黒色粘質土で炭化物・遺物を多量に含んでいた。土坑内からはコンテナケース2箱分の土師器小皿・坏、青磁碗などの遺物が出土した。土坑の用途としては廃棄土坑と考えられる。

出土遺物をFig-8に示した。

 $11\sim16$ は土師器小皿である。いずれも底部は糸切り調整され、 $12\cdot14\cdot15$ では板目圧痕が残る。 $17\sim20$ は土師器坏である。17はやや身が深く底部は糸切りされる。出土した小皿・坏の一部(小皿52点・

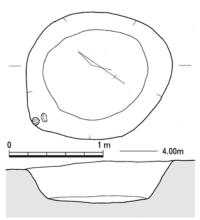


Fig. 7 SK-002実測図(S=1/40)

坏12点)の法量を計測した結果、小皿は口径9.2cm、底径7.2cm、器高1.2cm、坏では口径12.8cm、底径8.7cm、器高2.3cmの平均値を測る。小皿・坏共に底部は全て糸切り調整され、半分程度に板目圧痕が残る。21・22は白磁の口禿皿である。21は口縁端部でわずかに外反する体部を持ち、口唇部の釉が拭き取られる。23は瓦質土器の捏鉢である。体部はナデ調整され、内器面には上方へのナデ痕跡が残る。24は龍泉窯系青磁碗である。外器面には鎬連弁文が施される。25は同安窯系青磁碗である。内外器面に櫛描文が施される。26は中国陶器の鉢である。出土遺物よりこの廃棄土坑の年代は14世紀前半代の時期が考えられる。

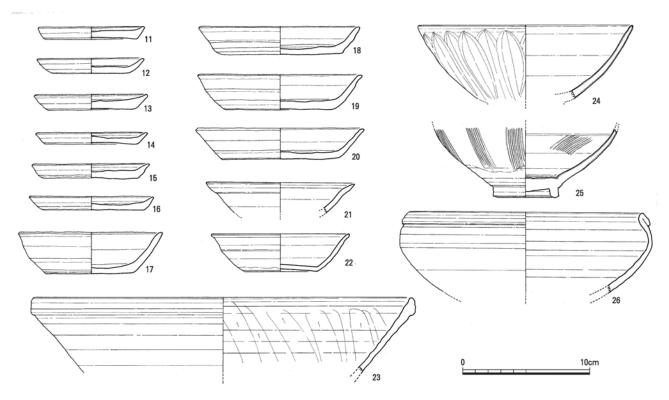


Fig. 8 SK-002出土遺物実測図(S=1/3)

SK-029 (Fig-9)

1区1面中央部で検出された円形の廃棄土坑である。土坑北側上半部は近世の方形廃棄土坑により攪乱されていたため攪乱除去後に平面形の確認を行い、土坑南側は標高3.90m前後の黄灰褐色整地面上で検出した。直径1.30m前後で、北側では検出面から土坑底面までは75cmの深さ(南側では1.6m)を測る。土坑底面は黄褐色砂層に達する。土坑の埋土は上層では黒褐色土で下層には炭化物・焼土を多く含む黒色粘質土が堆積しており、埋土からは糸切りの土師器小皿・坏や白磁碗、瓦などの遺物が出土した。

出土遺物をFig-10に示した。

27・28・30は白磁碗である。27は重ね焼きのため内部見込み周辺の釉が剥ぎ取りされる。28・30は口縁端部で折れる。釉調はいずれ

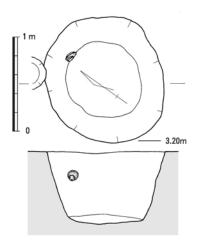


Fig. 9 SK-029実測図(S=1/40)

も乳白色で、体部下半まで施釉され、以下を露胎とする。29は中国陶器の蓋である。釉調は茶褐色で、 摘みは貼り付けてナデ調整される。31・32は軒平瓦である。いずれも小破片であり、全体の法量は判 然としない。色調はいずれも褐色で、胎土は精緻である。

これらの出土遺物より土坑の年代は14世紀代の時期が考えられる。

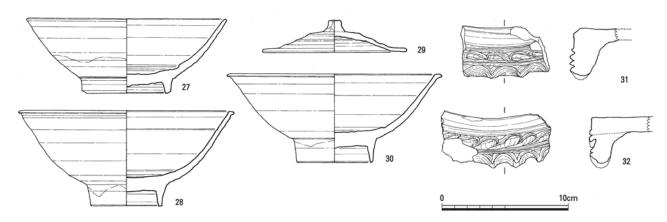


Fig. 10 SK-029出土遺物実測図(S=1/3)



Ph. 16 SK-029完掘状況(東から)



Ph. 17 SK-046遺物出土状況(南から)

SK-046 (Fig-11)

1区1面南側で検出された円形土坑である。標高3.65m 前後の暗黄褐色粘質土の整地層上で検出した。直径80~ 90cm前後を測り、検出面から土坑底面までは20cm前後の 深さを測る。土坑埋土は焼土・炭化物を含む暗褐色土で、 土坑内からは扁平な礫や獣骨、土師器小皿・坏、青磁碗な どの遺物が出土した。

出土遺物をFig-15に示した。

43は龍泉窯系青磁碗である。体部下半から高台部を欠損 する。内面は片切彫りにより区分され、その中に雲文を施 す。口径14.4cmを測り、釉調は暗オリーブ色を呈する。

44・45は同安窯系青磁碗である。44は内外器面に櫛描文 が施される。45は外器面に幅の広い櫛描文が施される。

これらの出土遺物より、土坑の年代は14世紀代の時期が 考えられる。

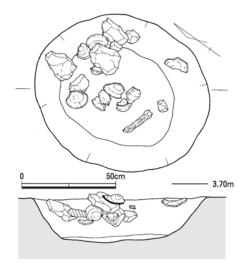


Fig. 11 SK-046実測図(S=1/20)

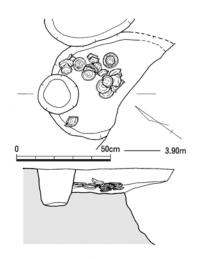


Fig. 12 SK-052実測図(S=1/20)

SK-052 (Fig-12)

1区1面東側で検出された浅い楕円形土坑である。標高3.80m 前後の灰黄色粘質土の整地面上で検出した。長軸70cm以上、短軸50cm前後を測り、検出面から土坑底面までは10cm前後の深さを測る。土坑埋土は焼土を含む暗褐色砂質土で、土坑内には14枚以上の土師器小皿が廃棄されていた。土坑の上面は近世の攪乱によって消失しており、土坑底面に近い遺物のみが検出されたものと考えられる。

出土遺物をFig-15に示した。

33~42は土師器小皿である。体部はナデ調整で成形され、底部はいずれも糸切り調整される。板目圧痕が残る個体が多い。焼成は良好で、色調は褐色~橙色を呈する。法量の平均値は、口径9.0cm、底径6.8cm、器高1.2cmを測る。



Ph. 18 SK-052遺物出土状況 (北から)



Ph. 19 SK-061遺物出土状況(西から)

SK-061 (Fig-13)

1区1面北東側で検出された円形土坑である。標高3.85m前後の黄灰褐色土の整地層面上で検出した。直径40cm、検出面から土坑底面までは35cm前後の深さを測る。土坑埋土は焼土・炭化物を含む黒褐色土で、土坑内からは土師器小皿・白磁玉縁碗・青白磁などの遺物が出土した。白磁碗は土坑底面から10cmほどの高さの地点から逆位に伏せた状態で出土した。

出土遺物をFig-15に示した。

47は白磁玉縁碗である。口径16.8cm、高台径7.8cm、器高8.2cmを測る。 釉調は濁乳白色を呈し、体部中程まで施釉され、以下を露胎とする。48 は青白磁合子蓋である。口縁部付近は露胎となる。

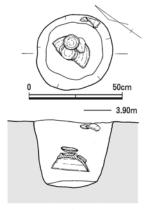


Fig. 13 SK-061実測図(S=1/20)

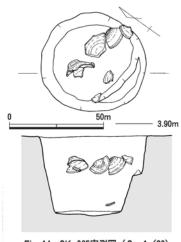


Fig. 14 SK-065実測図 (S=1/20)

SK-065 (Fig-14)

1区1面北東側で検出された円形土坑である。標高3.80m前後の黄灰褐色土の整地層面上で検出した土坑で、直径50~55cmを測り、検出面から土坑底面までは40cm前後の深さを測る。土坑埋土は焼土を含む暗褐色砂質土で、土坑中位付近から白磁碗・白磁四耳壺などの遺物が出土した。

出土遺物をFig-15に示した。

46は白磁玉縁碗である。口径14.8cm、器高6.7cmを測る。体部中程まで施釉される。49は中国陶器の四耳壺である。釉調は黄褐色を呈する。この他には白磁碗の墨書土器(Fig-56-493)が出土している。

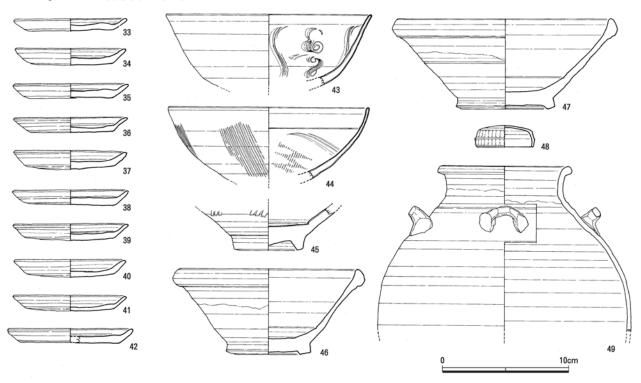


Fig. 15 出土遺物実測図(S=1/3)

SK-080 (Fig-16)

1区2面西側で検出された土坑である。標高2.90m前後の暗黄褐色砂層面上で検出した土坑である。 SK-081に切られており、残存する部分では直径1.25m前後を測る。検出面から底面までは80cm前後の深さを測る。底面直上付近には黒褐色粘質土が堆積し、上部には焼土・黄褐色粘質土・炭化物層が交互に堆積する。土坑からは土師器小皿・坏、白磁碗、中国陶器などの遺物が出土した。

出土遺物をFig-17に示した。

50・51は白磁玉縁碗である。釉調はいずれも乳白色を呈する。52は中国陶器の水注蓋である。釉調は暗茶褐色を呈する。53は中国陶器の茶褐釉水注である。把手は基部を残して欠損する。54は中国陶器の褐釉行平である。内器面は上半部の釉を拭き取り露胎とし、下半部を施釉する。

SK-081 (Fig-16)

1区2面西側で検出された楕円形の土坑である。SK-080・SK-082を切る。長軸1.80m、短軸1.30mを測り、検出面から底面までは65cm前後の深さを測る。上層には暗黄褐色粘質土が堆積し、中層には焼土・炭化物層・黄褐色粘質土が交互に堆積する。土坑底面直上には炭化物を含む黒褐色粘質土層が堆積する。土坑からは土師器小皿・坏、白磁碗、天目茶碗、青白磁などの遺物が出土した。

出土遺物をFig-17に示した。

55は近世染付盃である。上層の近世廃棄土坑SK-005からの混入品である。56・57は白磁高台付皿である。口縁部は玉縁状で、高台は削りだしで成形される。58は天目茶碗である。59は白磁碗である。60は青白磁の文鎮、または筆架である。端部を欠損しており、全長は不明である。粘土紐で蔦を模し、花弁を5枚持つ花を貼り付ける。胎土は白色で精緻、釉調は明オリーブ色を呈するが、底面は露胎とする。類例の増加を待ちたい。遺物より土坑の年代は12世紀代の時期が考えられる。

SK-082 (Fig-16)

1区2面西側で検出された楕円形土坑である。SK-080に切られる。掘り下げ時には不定形土坑として認識していたが、40cmほど掘り下げた時点で楕円形土坑が検出されたため、SK-082として掘り下げた。土坑内からは完形の瓦器椀と人骨上腕骨の一部が出土した。土坑墓の可能性も考えられたが、瓦器椀と骨が土坑底面より20cm前後の高さから出土していることや、歯や大腿骨などの遺存しやすい他の部位が全く出土しなかった点などを考慮して、この土坑については廃棄土坑と考えた。土坑近辺に土坑墓が存在し、後世に攪乱され、出土した遺物と人骨の一部が廃棄されたものと考えられる。

出土遺物をFig-17に示した。



Ph. 20 SK-080・081土層断面(北東から)



Ph. 21 SK-082遺物出土状況(北から)

61は白磁平底皿である。 釉調は濁乳白色を呈する。

62は白磁碗である。体部は丸味を帯び、高台脇まで施釉される。63・64は土師器塊の高台部片である。高台はいずれも貼り付け高台で、色調は褐色を呈する。65は瓦器椀である。口径17.4cm、高台径6.8cm、器高5.4cmを測る。外器面には斜行するへう磨きを施す。色調は黒灰色を呈する。

出土遺物より土坑の年代 は11世紀代前半の時期が考 えられる。

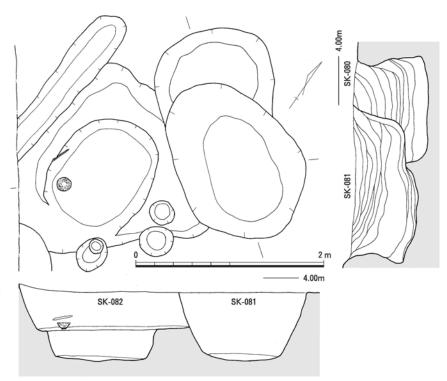


Fig. 16 SK-080 • 081 • 082実測図(S=1/40)

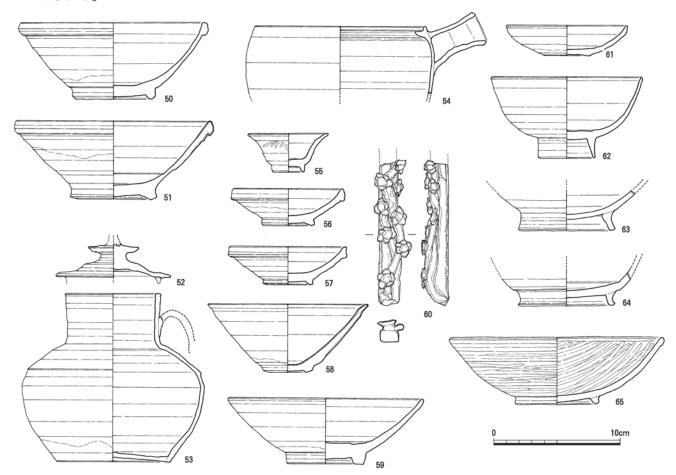


Fig. 17 出土遺物実測図(S=1/3)

SK-083 (Fig-18)

1区2面中央部西側で検出された円形土坑である。標高2.85m前後の暗黄褐色砂層面上で検出した土坑で、直径80cm前後を測る。検出面から土坑底面までは65cmの深さを測る。土坑の埋土の主体は暗褐色土で、下層には炭化物を多く含む黒褐色砂質土が堆積する。埋土からは底部糸切りの土師器小皿・坏、白磁などの遺物が出土した。

出土遺物をFig-19に示した。

66は白磁高台付皿である。口径10.6cm、高台径5.0cm、器高3.4cmを測る。 体部中程まで施釉される。67は白磁碗である。

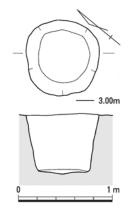


Fig. 18 SK-083実測図(S=1/40)

SK-156 (Fig-20)

1区2面南西側で検出された円形土坑で、標高2.85m前後の暗黄褐色砂層面上で検出した。直径1.30m前後を測り、検出面から土坑底面までは80cm前後の深さを測る。埋土は炭化物を含む暗褐色砂質土で、土師器小皿・坏、青磁碗、白磁碗などの遺物が出土した。廃棄土坑と考えられる。

出土遺物をFig-21に示した。

68は白磁小碗である。69は高麗青磁の碗である。畳付きの み露胎とする。釉調は暗オリーブ色を呈する。70は白磁碗で ある。内器面には櫛描文を施す。高台中程まで施釉する。 71は土師器坏である。内面見込みに草花文と見られる線刻が 施される。胎土は褐色で精緻、内外器面ともに丁寧なナデ調 整が施される。

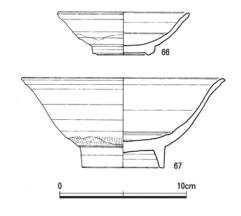


Fig. 19 SK-083出土遺物実測図 (S=1/3)

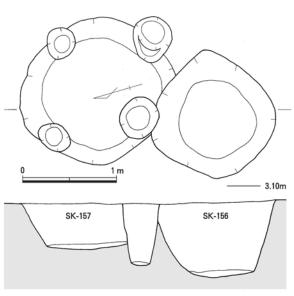


Fig. 20 SK-156 • 157実測図(S=1/40)

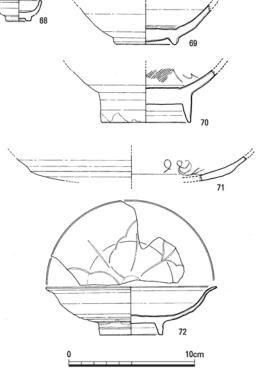


Fig. 21 出土遺物実測図(S=1/3)

SK-157 (Fig-20)

1区2面南西側で検出された土坑である。SK-156に切られる。直径1.55~1.70mを測り、検出面から土坑底面までの深さは50cm前後を測る。土坑底面は平坦で、埋土はSK-156と同様に暗褐色砂質土である。土師器小皿・坏、白磁器などの遺物が少量出土した。出土遺物をFig-21に示した。

72は白磁高台付皿である。内面に蕉葉文が施される。口径13.8cm、器高3.8cmを測る。



Ph. 22 SK-178遺物出土状況(北西から)

SK-178 (Fig-22)

1区2面南側で検出された円形の廃棄土坑である。標高3.05m前後の暗褐色砂層面上で検出した。直径1.20~1.40mを測り、検出面から土坑底面までの深さは90cm前後を測る。土坑埋土は焼土・炭化物を多く含んだ黒褐色粘質土で、上層からは土師器小皿・坏などの遺物が出土した。土坑下層から15cmほどの高さの部分で土師器小皿・坏、白磁碗、中国陶器、瓦器、瓦質土器などの遺物がまとまった状態で出土した。遺物の総量はコンテナケース2箱分である。廃棄土坑と考えられる。

出土遺物をFig-23に示した。

73・74は土師器小皿である。底部はいずれも糸切りされる。 口径はいずれも8.8cm、底径は6.5cm・6.6cm、器高は0.9cm・ 1.2cmを測る。75は土師器坏である。口径14.5cm、底径5.0cm、

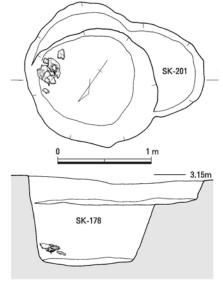


Fig. 22 SK-178 • 201実測図 (S=1/40)

器高3.0cmを測る。いずれも底面には板目圧痕が残る。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。76は瓦器椀である。口径16.2cm、高台径7.4cm、器高5.4cmを測る。外器面には横位のヘラ磨きが施され、内器面には斜格子状のヘラ磨きが施される。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。77は中国陶器の行平である。釉調は茶褐色を呈し、内器面は中程より露胎とする。

78は瓦器皿である。口径10.4cm、器高2.2cmを測る。底部はヘラ切り調整され、外器面は横位の密なヘラ磨き、内器面は放射状のヘラ磨きが施される。色調は黒灰色で、焼成は良好である。

79は白磁平底皿である。外器面体部中程まで施釉し、以下は露胎とする。釉調は乳白色を呈し、胎土は精緻である。80は白磁高台付皿である。口縁部は玉縁状に成形される。口径9.4cm、高台径4.4cm、器高3.2cmを測る。釉調は乳白色を呈する。81・82は白磁碗である。81は口縁端部で外反する体部を持ち、高台中程まで施釉する。口径17.2cm、高台径6.2cm、器高7.2cmを測る。釉調は乳白色を呈する。82は玉縁状口縁を持ち、体部中程まで施釉する。口径16.6cm、高台径7.4cm、器高6.4cmを測る。83は白磁鉄絵鉢である。口径24.2cm、高台径8.8cm、器高8.2cmを測る。口縁端部は折り返しを持つ。外器面中程まで施釉され、以下を露胎とする。胎土は灰白色で精緻、釉調は濁乳白色を呈する。86は瓦質土器の甕である。復元口径26.4cm、頸部径21.0cmを測る。外器面には並行叩きの痕跡が残る。内器面はナデ調整が施される。焼成は良好で、色調は黒灰褐色を呈する。

これらの出土遺物より、この土坑の年代は12世紀前半代の時期が考えられる。

SK-201 (Fig-22)

1区2面南側で検出された楕円形土坑である。SK-178に切られ、SD-186を切るように掘削される。 直径は1m前後を測り、検出面から土坑底面までの深さは20cm前後を測る。土坑の埋土は暗褐色砂 質土で、炭化物を多く含む。遺物は埋土より青白磁、白磁碗などが出土した。

出土遺物をFig-23に示した。

84は青白磁の小碗である。口径11.4cm、高台径4.6cm、器高6.2cmを測る。体部は丸味を帯び、口縁端部で折れて外に開く。胎土は白色で精緻、釉調は青乳色を呈する。85は白磁玉縁碗である。口径15.2cm、高台径7.8cm、器高6.5cmを測る。外器面中程まで施釉され、以下を露胎とする。釉調は乳白色で、胎土は灰白色で精緻である。

SK-185 (Fig-24)

1区2面南側で検出された土坑で、標高3.00m前後の暗褐色砂層面上で検出した。土坑南側は調査 区壁面保護のため掘り下げを行っておらず、土坑北側のみを調査した。現状で直径1.50m前後を測り、 検出面から土坑底面までの深さは80cm前後を測る。土坑埋土は上層では焼土・炭化物を含む暗褐色

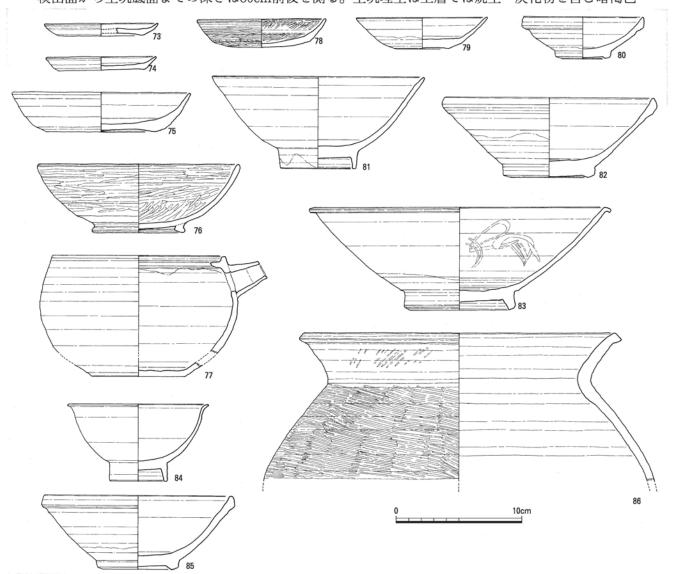


Fig. 23 出土遺物実測図(S=1/3)

土で、中層には焼土を多く含む黄褐色土、下層には黒褐色粘質土が堆積する。土坑からは土師器小皿・坏、白磁碗、青磁碗、瓦器椀、中国陶器などの遺物が出土した。

出土遺物をFig-25に示した。

87~92は土師器小皿である。底部は全て糸切り調整され、半数の底部に板目圧痕が残る。口径の平均値は9.1cm、底径の平均値は6.8cm、器高は1.2cmを測る。いずれも焼成は良好で、色調は褐色を呈する。96~99は土師器坏である。底部はいずれも糸切り調整され、板目圧痕が残る。口径の平均値は14.6cm、底径の平均値は10.8cm、器高の平均値は2.8cmを測る。焼成はいずれも良好で、色調は褐色~暗褐色を呈する。

93・94は白磁平底皿である。93は口径11.0cm、底径4.2cm、器高2.2cmを測る。底部は露胎とし、釉調は暗乳白色を呈する。94は内面に

は線刻で葉文を施す。釉調は 乳灰色を呈する。

95は天目茶碗である。高台 部以下を欠損する。口径は 12.4cmを測る。釉中は黒褐 色を呈し、胎土は暗灰褐色を 呈し精緻である。

100は白磁玉縁碗である。 口径16.2cm、高台径7.4cm、 器高5.8cmを測る。釉調は灰 乳色を呈し、体部中程まで施 釉する。

101は龍泉窯系青磁碗である。口径は17.2cm、高台径7.4cm、器高7.2cmを測る。 和調は暗オリーブ色で、畳付きまで施釉し、高台内を露胎とする。

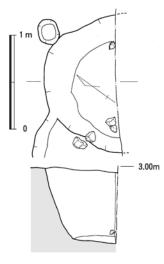


Fig. 24 SK-185実測図(S=1/40)

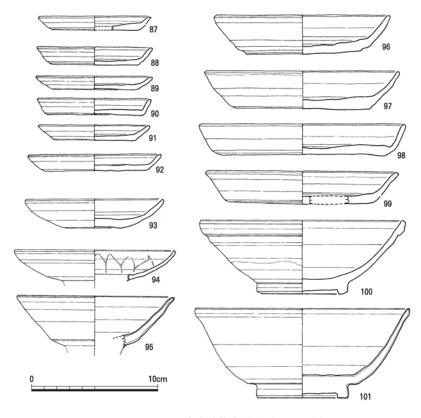


Fig. 25 SK-185出土遺物実測図 (S=1/3)

SK-342 (Fig-26)

2区1面南西側で検出された円形の廃棄土坑である。標高3.95m前後の暗褐色砂層面上で検出した。 古墳時代の竪穴住居であるSC-401を切る。土坑西側は調査区壁面保護のため、掘り下げは行っていない。土坑の直径は2.10m前後を測り、検出面から土坑底面までの深さは1.60m前後を測る。土坑内には上層で焼土・炭化物・黒色粘質土が交互に堆積し、中位に黄褐色土、下層には暗青灰色粘質土が堆積している。遺物は土師器小皿・坏、白磁器、瓦器、中国陶器、青白磁壺、平瓦などが出土している。

出土遺物をFig-28に示した。

102は青白磁の合子蓋である。復元口径6.6cm、 器高1.4cmを測る。口端部を露胎とする。

103は中国陶器の蓋である。釉調は暗茶褐色を 呈し、胎土は褐色で精緻である。外器面は露胎と し、内器面のみに施釉する。

104は白磁平底皿である。口径9.8cm、底径3.6cm、

器高2.7cmを測る。釉調は灰乳色で、体部中程ま で施釉する。105は瓦器椀である。内器面には平 行するヘラ磨きが施される。色調は黒灰色を呈す る。106は白磁壺底部片である。復元底径は 9.6cmを測る。釉調は乳白色で、胎土は灰白色を呈する。 135は陶器甕の口縁部片である。

これらの出土遺物より、土坑の年代は12世紀前半代の時 期が考えられる。

SK-343 (Fig-27)

2区1面南側中央部で検出された円形の廃棄土坑である。 SK-342と同様に標高3.95m前後の暗褐色砂層面上で検出 した。直径1.20~1.50m前後を測り、検出面から土坑底面 までの深さは1.25m前後を測る。土坑内には下層に黒褐色 粘質土が堆積し、上層には焼土・炭化物を含む黒褐色砂質 土が堆積していた。土坑底面はほぼ平坦となる。土坑内か らは土師器小皿・坏、白磁碗、青磁碗・青白磁皿などの遺 物が出土した。出土遺物をFig-28に示した。

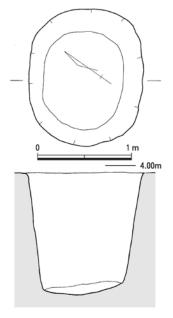
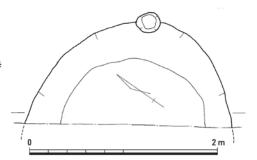


Fig. 27 SK-343実測図(S=1/40)



Ph. 23 SK-342土層断面(北東から)



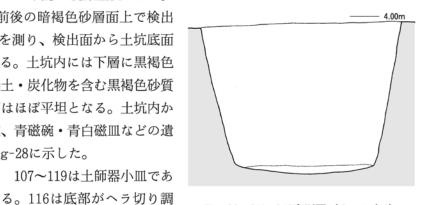


Fig. 26 SK-342実測図(S=1/40)

はいずれも底部が糸切り調整される。法量の平均値を計測すると口径は 9.2cm、底径は6.7cm、器高は1.2cmを測る。いずれも焼成は良好で、色 調は褐色を呈する。120~125は土師器坏である。底部はいずれも糸切り される。法量の平均値は口径14.1cm、底径は9.6cm、器高2.8cmを測る。 焼成は良好で、色調は橙色~褐色を呈する。

126は青白磁の皿である。内面に雷文を施し、見込みには型押しで装 飾を施す。127・128は龍泉窯系青磁碗である。いずれも畳付きから高台 内を露胎とする。内器面は片切彫りで区分し、その中に雲文を施す。釉 調はいずれも暗オリーブ色を呈する。

129は青白磁平底皿である。130~134は白磁碗である。130・131は玉 縁状口縁を持つ碗である。

これらの出土遺物より、遺構の年代は12世紀代後半の時期が考えられ る。

107~119は土師器小皿であ

整されるが、それ以外の小皿

SK-344 (Fig-29)

2区1面南側で検出された楕円形の廃棄土坑である。SK-342・SK-343等の廃棄土坑と同様に標高 3.90m前後の暗褐色砂層面上で検出した。長軸1.70m×短軸1.40m前後を測り、検出面から土坑底面までの深さは90cm前後を測る。埋土は他の廃棄土坑と同様に下層に黒褐色粘質土、上層に炭化物を多く含む黒褐色砂質土が堆積する。土坑底面からは直径20~30cm前後のピットが検出される。土坑埋土からは土師器小皿・坏、白磁器、同安窯系青磁碗、中国陶器などの遺物が出土した。

出土遺物をFig-32に示した。

136~142は土師器小皿である。いずれも底部は糸切り調整される。法量の平均値は、口径9.0cm、底径6.8cm、器高1.3cmを測る。いずれも焼成は良好で、色調は褐色を呈する。143は土師器坏である。

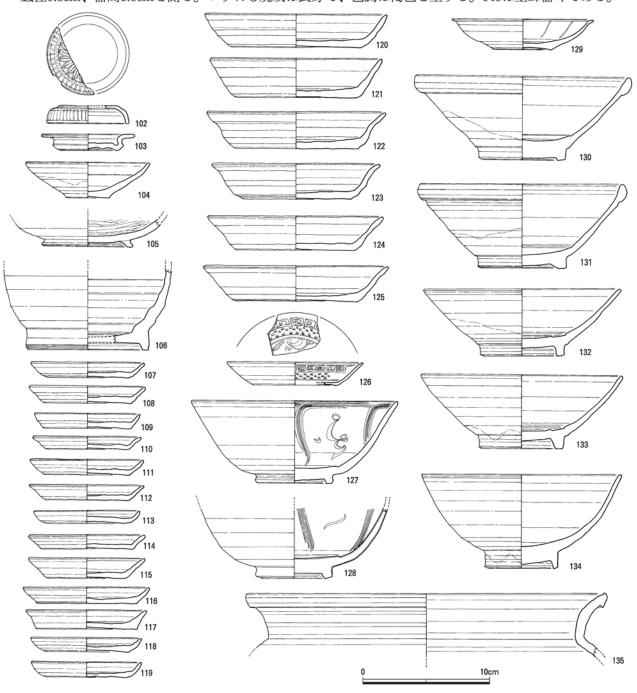


Fig. 28 出土遺物実測図(S=1/3)

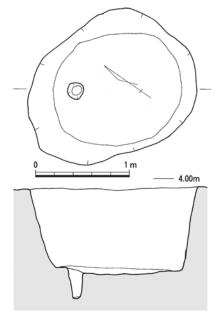


Fig. 29 SK-344実測図 (S=1/40)

口径15.5cm、底径11.3cm、器高3.1cmを測る。底部は糸切りで調整され、板目圧痕が残る。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。144は白磁高台付皿である。145は白磁平底皿である。いずれも体部中程まで施釉される。

これらの出土遺物より、遺構の年代は12世紀後半代の時期が考えられる。

SK-345 (Fig-30)

2区1面南側で検出された土坑である。検出面の標高は3.90m 前後を測り、北東側の一部は調査区外に延びるため、土坑全体の 形状は正確には把握できなかった。調査で検出された部分では平 面形は楕円形を呈し、長軸1.10m前後を測る。検出面から土坑底 面までの深さは90cm前後を測り、土坑内下層には暗褐色粘質土が、 上層には黒褐色土が堆積する。遺物は土師器小皿・坏の他、白磁 器・中国陶器などが出土した。

出土遺物をFig-32に示した。

146は白磁高台付皿である。見込み周囲の釉は剥ぎ取りされる。釉調は灰乳色で、体部中程まで施釉される。147は中国陶器褐釉の四耳壺である。口径11.4cmを測る。

SK-346 (Fig-30)

2区1面南側で検出された土坑である。SK-345・SE-379に切られる土坑で、現状での平面形は楕円形を呈する。検出面から土坑底面までの深さは95cm前後を測り、埋土は上層で黒褐色砂質土、下層には暗褐色砂が堆積する。土坑からは土師器小皿・坏、白磁器、緑釉陶器などの遺物が出土した。

出土遺物をFig-32に示した。

148は土師器小皿である。底部は糸切り調整される。口径9.2cm、底径7.4cm、器高1.2cmを測る。

149は土師器小皿で、底部はヘラ切りされる。口径8.6cm、底径5.8cm、器高1.1cmを測る。色調は 褐色を呈する。150は白磁高台付皿である。口縁部は玉縁状になり、体部にはヘラナデ痕が残る。釉

調は乳白色を呈する。151は緑釉陶器の碗片である。152は邢州窯白磁碗である。153は白磁碗である。内器面には白色の釉で条線を施す。

154は灰釉陶器碗である。いわゆ る山茶碗である。

これらの出土遺物より、この土坑 の年代は12世紀前半代の時期が考え られる。

SK-348 (Fig-31)

2区1面南東側で検出された円形 の廃棄土坑である。検出面の標高は

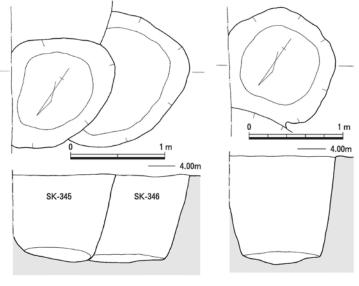


Fig. 30 SK-345·346実測図(S=1/40)

Fig. 31 SK-348実測図(S=1/40)

3.90m前後で、直径1.30m、検出面から土坑底面までの深さは1.20mを測る。土坑埋土は上層に炭化物を多く含む黒褐色粘質土、中層に炭化物・焼土を含む黄褐色粘質土、下層に暗褐色砂が堆積していた。遺物は土師器坏、白磁器・青磁器などが出土した。

出土遺物をFig-32に示した。

 $155 \cdot 158$ は白磁高台付皿である。155は見込み周囲の釉が剥ぎ取られる。158は内面に櫛描文を施す。 $156 \cdot 157 \cdot 159 \sim 161$ は白磁碗である。161は玉緑碗で、体部下半にはヘラナデ痕が残る。

162~164は同安窯系青磁碗である。162・163は外器面に櫛描文を施し、内器面には櫛描による雲文を施す。164は外器面に片切彫りで線刻を施し、内器面には横位の片切彫りと櫛描文を施す。

これらの出土遺物より、この遺構の年代は12世紀前半代の時期が考えられる。

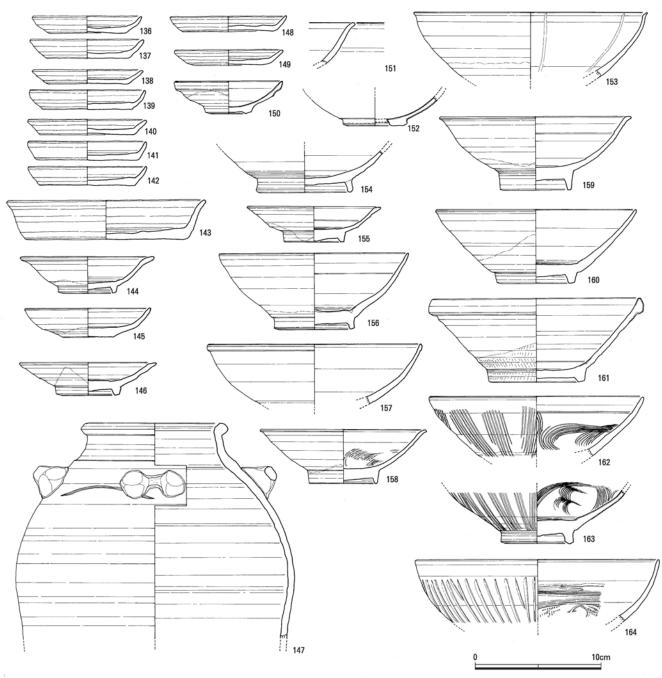


Fig. 32 出土遺物実測図(S=1/3)

SK-351 (Fig-33)

2区1面北西側で検出された廃棄土坑である。標高3.90m前後の暗黄灰褐色粘質土の整地面上で検出した。現状での平面形は楕円形を呈し、長軸1.50m以上で検出面から土坑底面までは1.20m前後の深さを測る。土坑埋土は暗灰褐色土で、下層には焼土・炭化物を含む黒褐色砂質土が堆積していた。土坑からは土師器小皿・坏、白磁器などの遺物が出土した。出土遺物をFig-35に示した。

165~174・179・180は土師器小皿である。175~178は土師器坏である。底部は全て糸切り調整される。181は白磁口禿皿である。182は白磁平底皿である。183は白磁小壺である。184は青白磁合子身である。185は白磁平底皿である。186は瓦器椀である。187・189・190は白磁碗である。188は白磁壺である。遺構の年代は、14世紀前半と考えられる。

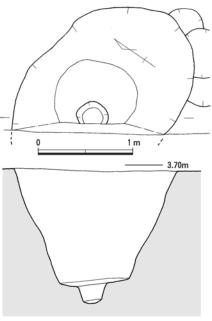


Fig. 33 SK-351実測図(S=1/40)

SK-368 (Fig-34)

2区1面中央部東側で検出された土坑である。標高3.80m前後の暗褐色砂層面上で、直径1.20m前

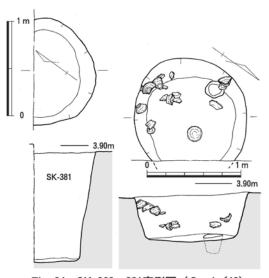


Fig. 34 SK-368·381実測図(S=1/40)

後、検出面から土坑底面までは50cm前後の深さを測る。 土坑埋土は焼土・炭化物を含んだ暗灰褐色砂質土で、土 坑内からは扁平礫と共に土師器小皿・坏、白磁器などの 遺物が出土した。出土遺物をFig-35に示した。

191は土師器小皿である。底部は糸切りされる。192は白磁平底皿である。193は土師器坏である。底部はヘラ切りされる。194は土師器埦である。

SK-381 (Fig-34)

2区1面南側で検出された廃棄土坑である。土坑北側は掘り下げを断念したため、南側のみ掘り下げを行った。標高3.80m前後の暗褐色砂層面上で検出を行い、現状での平面形は円形を呈し直径1.10m前後を測る。検出面から土坑底面までは1.15m前後の深さを測る。土坑上層に



Ph. 24 SK-351完掘状況(南東から)



Ph. 25 SE-393調査状況(北西から)

は焼土を含む黒褐色土、下層には黒褐色砂が堆積していた。 出土遺物をFig-35に示した。 195は白磁高台付皿である。196~200は白磁碗である。198・199は玉縁状口縁を持つ碗である。

SE-393 (Ph. 25)

2区西側で検出した井戸遺構である。調査区壁際に位置しており、井筒などの主体部は調査区外に 位置するため未検出である。調査区壁面保護のため、井戸掘方の完掘は行っていない。前述したよう

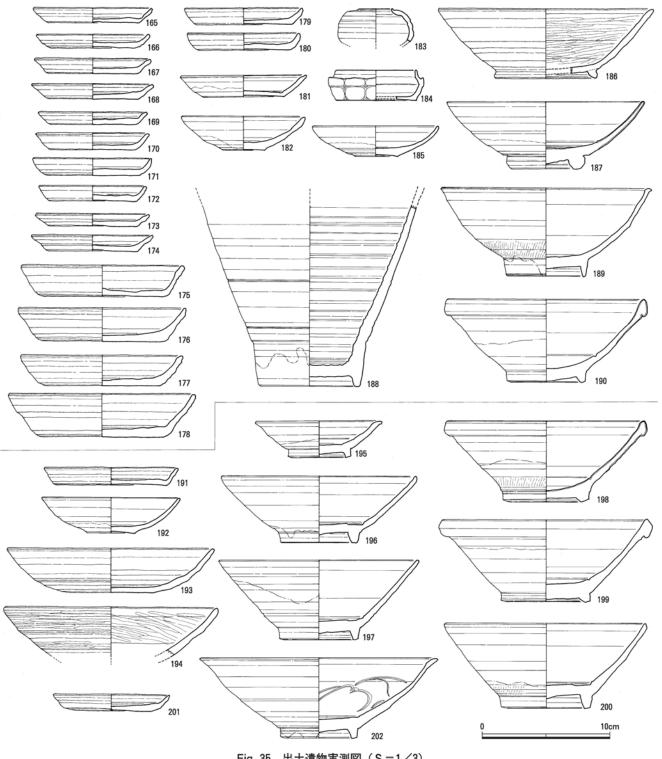


Fig. 35 出土遺物実測図(S=1/3)

に、本調査では井戸が本遺構を含めて2基(SE-379・SE-393)しか検出されておらず、隣接する調査区と比較しても極端に検出数が少ない。屋敷地内の建物配置や調査区一帯の景観復元作業において 貴重な知見と言えよう。出土遺物をFig-35に示した。

201は土師器小皿である。底部はヘラ切り調整され、体部はナデ調整で成形される。焼成は良好で、 色調は褐色を呈する。202は白磁碗である。

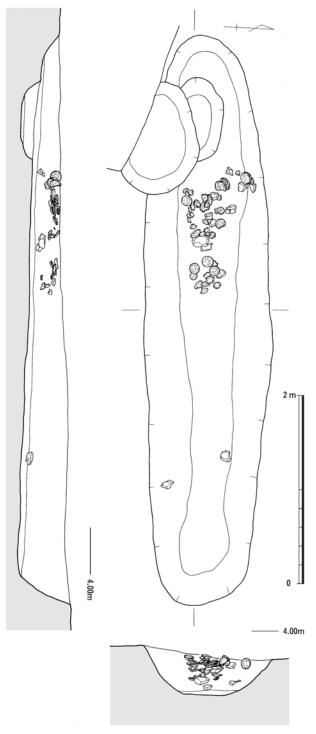


Fig. 36 SD-001実測図(S=1/40)

3. 溝状遺構

本調査では、15条の溝状遺構が検出された。 溝状遺構は道路遺構・建物遺構などと同様に、 調査区一帯の既に失われた景観の復元を行う 上で重要な要素であり、時代毎の建物規制の 方向性や空間の区画を示す手掛かりの一つで ある。調査区近辺の景観復元について詳しく は第三章のまとめにて触れることとし、以下 では各溝遺構についての説明を行う。

SD-001 (Fig-36)

1区1面西側で検出された溝状遺構である。 検出面の標高は3.80m前後で、黄灰褐色土の 整地面上で検出した。溝上面での幅は1.35m、 底面では幅60cm前後、長さは6mを測る。 溝の断面形は緩いU字形を呈しており、検出 面から溝底面までの深さは20~50cmを測る。 溝は西側方向に向けて徐々に浅くなる。

埋土は炭化物・焼土と黄褐色粘質土をブロ



Ph. 26 SD-001遺物出土状況(南から)





Ph. 27 SD-001土層断面(南から)

Ph. 28 SD-001遺物出土状況(東から)

ック状に含む暗褐色土で、底面直上には炭化物を多く含む黒褐色粘質土が薄く堆積する。溝の主軸は N-87°-Eの方向を採り、ほぼ東西方向の主軸を持つ。溝の埋土上層からは大量の土師器小皿・坏が礫と共に廃棄された状態で出土した。土師器小皿・坏は完形のものが多く、饗宴の際に使用され、そのまま溝内に投棄されたものと考えられる。

出土遺物をFig-37に示した。

203~209は土師器小皿である。いずれも底部は糸切り調整される。210・212~214は土師器坏である。底部はいずれも糸切り調整される。80点以上の小皿・坏で法量を計測した結果、小皿の法量の平均値は、口径8.2cm、底径5.5cm、器高1.5cm前後を測る。いずれも焼成は良好で、色調は褐色~橙色を呈する。坏の法量の平均値は、口径12.6cm、底径8.2cm、器高2.8cm前後を測る。板目圧痕は出土した小皿・坏総数の中、半分程度で観察できる。211は古瀬戸の卸皿である。復元口径16.4cmを測る。底部が欠損するため、卸目の端部のみが器面で観察できる。215は龍泉窯系青磁高台付皿である。外器面には連弁文を施す。釉調は明オリーブ色を呈する。216は龍泉窯系青磁碗である。高台中程まで施釉し、以下を露胎とする。内器面には片切彫りと櫛描文で装飾を施す。217は瓦質土器の捏鉢である。これらの出土遺物より、この溝遺構の年代は14世紀代の時期が考えられる。

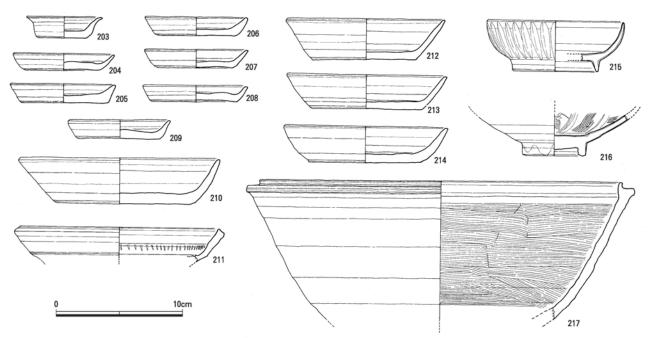


Fig. 37 SD-001出土遺物実測図 (S=1/3)

SX-050 (Fig-38)

1区1面東側で検出された溝状遺構である。標高3.90m前後の暗黄灰褐色粘質土の整地面上で検出した。溝上面での幅は3.40m前後を測り、主軸はN-80°-Eの方向で、ほぼ東西方向の主軸を採っている。検出時には、規模の大きい土坑と考えていたが、土層断面の観察から溝遺構と判断した。溝の断面形は逆台形を呈し、底面付近での幅は2.00m前後を測る。検出面から溝底面までは1.20m前後の深さを測る。溝の西側は段を有し、立ち上がる。延長方向では溝遺構は検出されなかったため、溝の西側端部付近、または陸橋部付近に位置しているものと考えられる。土層断面の観察から溝は大きく二時期に分けられる。溝埋土は上層から大別して暗褐色砂質土、暗褐色粗砂、焼土・炭化物を多く含む暗褐色土、黒褐色粘質土と堆積しており、下層には暗褐色粗砂、暗灰褐色砂質土、暗黄褐色粘質土、黒褐色砂質土と堆積する。この上層部と下層部の境目付近からは上層部溝に伴う土師器などの遺物が大量に廃棄された状態で検出された。遺物の大部分は溝の壁面際に沿うように投棄されており、廃棄坑として利用されたものと考えられる。投棄は遺物の出土状態より南西側より行われた可能性が考えられる。この遺構からは土師器小皿・坏、青磁碗、白磁器、中国陶器などが出土しており、遺物の総量はコンテナケース20箱分以上を数える。また、これらの遺物に混じって溝底面付近からはヘラ切りの土師器とともに肩胛骨と考えられる獣骨等が出土した。

出土遺物をFig-39・40に示した。

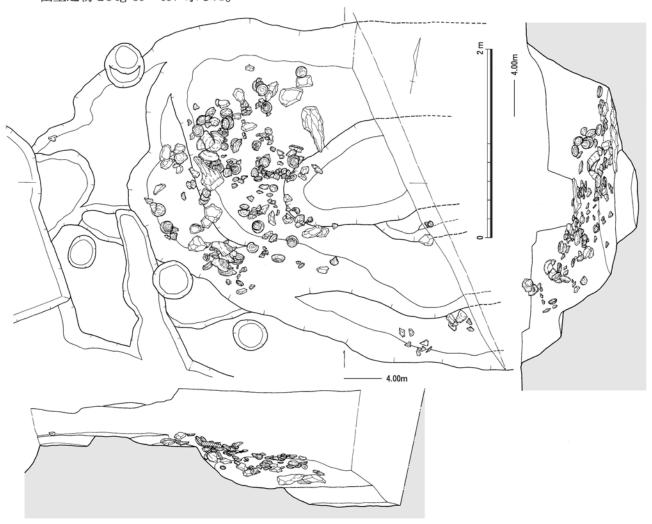


Fig. 38 SX-050実測図(S=1/40)

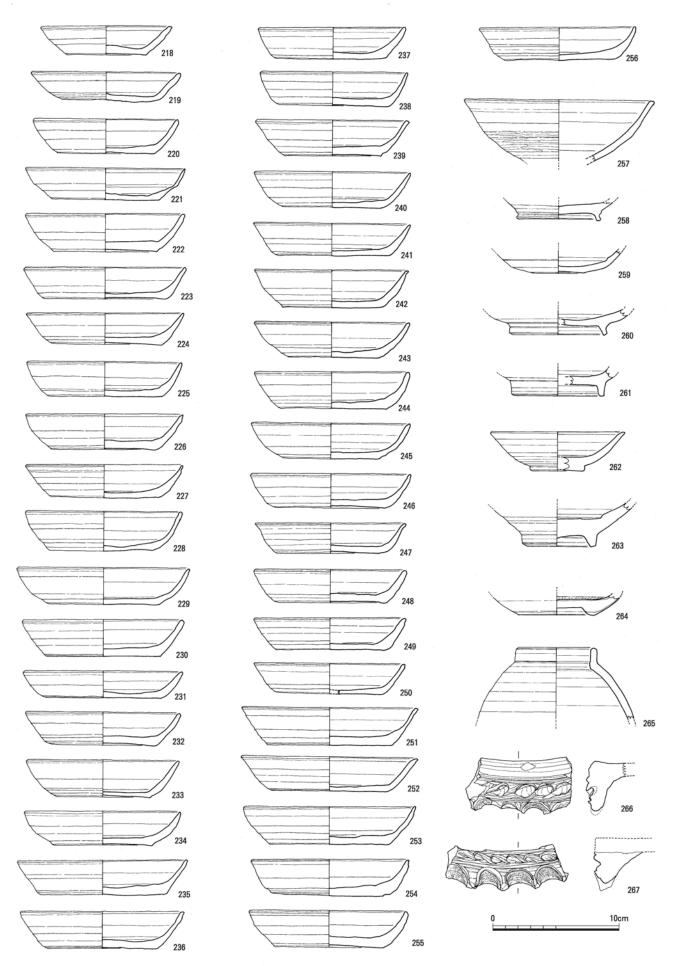


Fig. 39 SX-050出土遺物実測図(S=1/3)

218~256は土師器坏である。底部はいずれも糸切り調整され、板目圧痕が残るものが半分程度を数える。出土した小皿・坏で法量を計測できた個体の総数は138枚を数える。坏の法量の平均値は、口径12.5cm、底径8.3cm、器高2.8cm前後を測る。小皿の法量の平均値は、口径8.0cm、底径6.1cm、器高1.7cm前後である。257・258・260は瓦器椀である。259は同安窯系青磁の平底皿である。

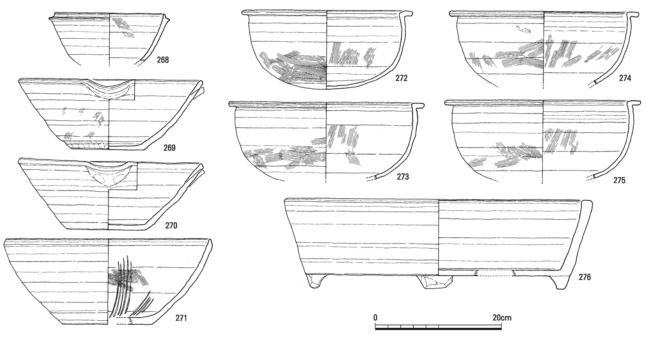


Fig. 40 SX-050出土遺物実測図(S=1/6)



Ph. 29 SX-050調査状況(北から)



Ph. 31 SX-050完掘状況(西から)



Ph. 30 SX-050遺物出土状況(北西から)



Ph. 32 SX-050土層断面(西から)

261は越州窯系青磁の壺底部片である。262は白磁高台付皿である。263は同安窯系青磁碗である。264は龍泉窯系青磁碁笥底皿である。265は中国陶器の長瓶である。266・267は軒平瓦である。

268は瓦質土器の鉢である。269・270は瓦質土器の片口鉢である。271は瓦質土器の擂鉢である。272~275は土師質土器の土鍋である。いずれも外器面下半部に煤が付着する。276は瓦質土器の火舎である。復元口径47.4cmを測り、三足の脚を持つ。胎土は灰色で精緻、色調は黒色を呈する。

これらの出土遺物より、この遺構の主要な年代は12世紀前半 代から14世紀代の二時期が考えられる。

SD-006 (Fig-41)

1区1面南側で検出された溝状遺構である。溝の東側は排土処理の都合で未調査部分にあたり、西側は近世の廃棄土坑によって切られる。標高3.60~3.70m前後の黄灰色土の整地面上で検出した。幅1.0~1.4mを測り、断面形は逆台形を呈する。検出面から溝底面までの深さは50cm前後を測る。溝の主軸はN-86°-Eの方向で、SX-050と同様にほぼ東西方向の主軸を採る。

埋土は焼土を多く含む暗褐色土で、底面には黒褐色粘質土が薄く堆積する。この溝は検出面以下の二面の整地層を掘り抜いており、北側壁面には下層の整地面が帯状に観察された。遺物は土師器小皿・坏、青磁碗、白磁碗、中国陶器などが出土した。出土遺物をFig-42に示した。

277~282は土師器小皿である。283~286は土師器坏である。 土師器小皿・坏の底部はいずれも糸切り調整され、板目圧痕が 0 1 m

Fig. 41 SD-006実測図(S=1/40)

残るものが多い。法量の平均値は小皿で、口径8.8cm、底径6.5cm、器高1.3cm前後を測る。いずれも 焼成は良好で、色調は褐色~橙色を呈する。坏では口径13.5cm、底径9.2cm、器高2.4cmの平均値を 測る。これらも焼成は良好で、色調は橙色~褐色を呈する。法量を計測できた個体は小皿で21点、坏 で27点を測る。287は中国陶器皿である。口径10.4cm、底径3.4cm、器高3.4cmを測り、釉調は暗茶褐 色を呈する。288は天目茶碗である。高台部を欠損し、復元口径は11.4cmを測る。

289は白磁平底皿である。口径10.6cm、底径3.8cm、器高2.4cmを測る。体部中程まで施釉し、以下を露胎とする。釉調は乳灰色で、胎土は灰白色を呈する。290は白磁碗である。体部は丸味を帯び、口縁端部でわずかに外反する器形を持つ。内器面には白色釉で条線を施す。釉調は乳白色で、高台中程まで施釉する。口径12.2cm、高台径4.6cm、器高6.6cmを測る。

291は龍泉窯系青磁束口碗である。口径12.6cm、高台径4.6cm、器高5.4cmを測る。口縁は内傾し、端部で外反する器形を持つ。釉調暗オリーブ色で、高台中程まで施釉され、以下を露胎とする。

292・293は同安窯系青磁平底皿である。292は復元口径10.6cm、底径4.4cm、器高2.2cmを測る。内面見込み内には櫛描文を施す。体部下半部まで施釉し、以下を露胎とする。293は口径10.4cm、底径5.8cm、器高1.8cmを測る。外底部まで施釉し、内底部は露胎とする。釉調はいずれも暗オリーブ色

を呈する。294・295は龍泉窯系青磁碗である。294は復元口径15.6cm、高台径5.8cm、器高6.1cmを測る。外器面には蓮弁文を施し、内面見込みには「金玉満堂」のスタンプを刻印する。釉調はオリーブ色で、高台中程まで施釉され以下を露胎とする。295は口径16.6cm、高台径6.8cm、器高7.6cmを測る。内器面は片切彫りで五区分され、その中に雲文が施される。釉調は暗オリーブ色で、高台中程まで施釉される。296は青白磁高台付皿である。火災などの二次的な被熱により、器面を覆っていた釉は全

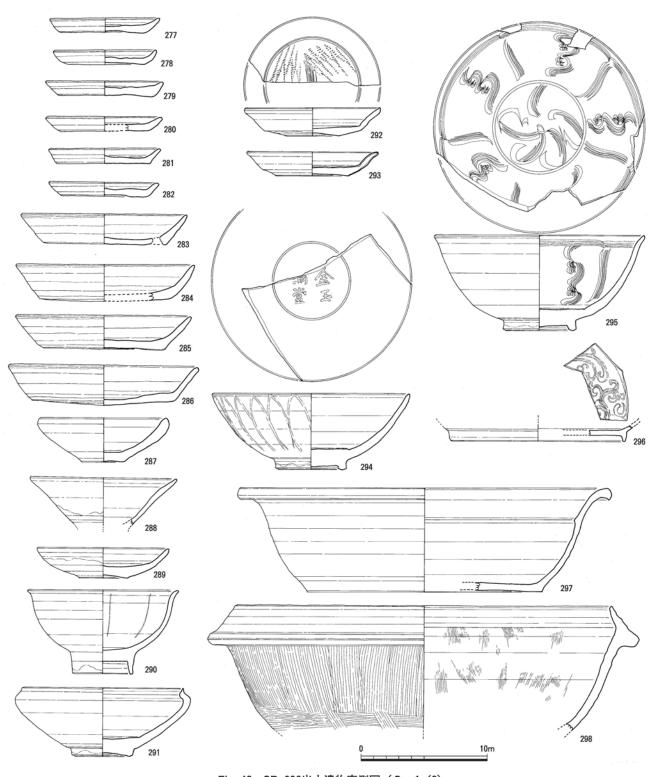


Fig. 42 SD-006出土遺物実測図(S=1/3)

て溶け落ちている。見込みには草花文が施される。

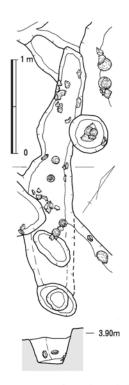
297は中国陶器盤である。口径29.6cm、底径18.8cm、器高8.2cmを測る。釉 調は黄褐色を呈する。298は土師質土器の捏鉢である。復元口径29.8cmを測る。 外器面には幅の広い刷毛目調整が施され、内器面は刷毛目調整がわずかに残る。 これらの遺物より、この溝の年代は14世紀代の時期が考えられる。

SD-063 (Fig-43)

1区1面東側で検出された溝状遺構である。SX-050を切るように掘削された 溝遺構で、主軸はN-35°-Wの方向を採る。上面での幅は50cm、底面での幅は 20~40cm前後、長さ2.70mを測る。検出面から溝底面までは35cm前後の深さ を測る。溝の断面形は逆台形で、埋土は焼土を多く含んだ黒褐色砂質土である。 溝底面からは土師器などの遺物が出土した。

出土遺物をFig-4に示した。

299~304は土師器小皿である。底部はいずれも糸切り調整される。305・306 は土師器坏である。307は耀州窯系青磁碗である。復元口径19.6cmを測る。外 器面には片切彫りによる線刻を施し、内器面には片切彫りと櫛描文による装飾 を施す。釉調は暗オリーブ色を呈する。308・309は白磁平底皿である。310は Fig. 43 SD-063実測図(S=1/40) 白磁玉縁碗である。



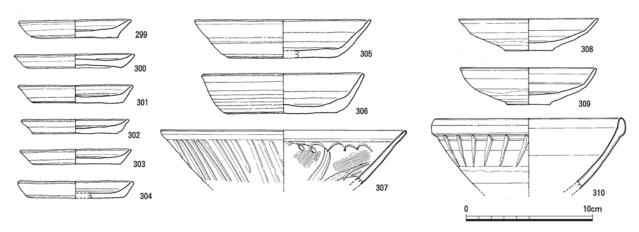


Fig. 44 SD-063出土遺物実測図 (S=1/3)



Ph. 33 SD-186検出状況(西から)



Ph. 34 SD-186土層断面(東から)

SD-186 (Fig-45)

1区2面南側で検出された溝状遺構である。SD-174が平行するように掘削される。標高3.00m前後の暗色砂層面上で検出した。主軸はN-83°-Eの方向で、ほぼ東西方向の主軸を採る。平行するSD-174はわずかに東に振れるが、ほぼ同一方向を採る溝遺構である。上面での幅は50cm前後を測り、断面形はほぼ長方形を呈するが、溝底面北側では一段深くなる。検出面から溝底面までは65cmの深さを測る。平行するSD-174は南側が未調査区に位置するため幅は不明であるが、2区で検出されたSD-404から推測して、幅85cm前後と考えられる。検出面から溝底面までは75cm前後を測り、断面形は逆台形を呈すると考えられる。

出土遺物をFig-46に示した。

311・312は土師器小皿である。底部はいずれもヘラ切り調整される。311は口径は9.4cm、底径7.0cm、器高1.2cmを測る。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。313は瓦器椀である。復元口径17.4cm、高台径7.4cm、器高5.0cmを測る。内外器面共に丁寧なヘラ磨きを施す。焼成は良好で、色調は黒灰色を呈する。

314は土師器埦の高台部片である。内器面には平行するへラ磨きを施し、色調は褐色を呈する。316は須恵器蓋の摘み部片である。

これらの出土遺物より遺構の年代は8世紀後半から9世紀初頭の時期が考えられる。

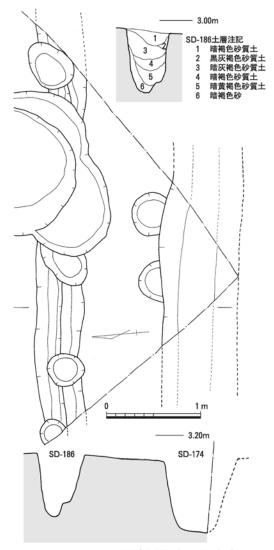


Fig. 45 SD-174 • 186実測図 (S=1/40)

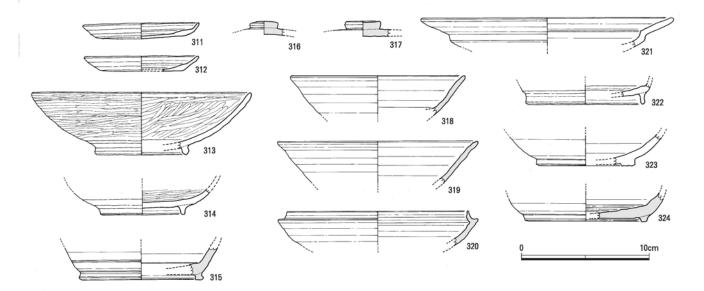


Fig. 46 出土遺物実測図(S=1/3)

SD-403 · 404 (Fig- 4 参照)

2区2面西側で検出された溝状遺構である。検出位置・層位 よりSD-174・186と同一の溝遺構と考えられる。

SD-403は幅40~55cm、検出面から溝底面までは30cm前後を測る。溝の断面形はほぼ方形を呈する。SD-404は幅1.0m、検出面から溝底面までは20cm前後の深さを測る。主軸方向・溝底面の標高はいずれもほぼ同じ数値を測る。

SD-403・SD-404ともに上部が削平されていたため、最下層に堆積する暗褐色砂のみが観察された。埋土からはヘラ切りの土師器小皿、須恵器などが出土する。

出土遺物をFig-46に示した。

315は須恵器碗の高台部片である。復元高台径は9.8cmを測る。 焼成は良好で、色調は濃灰色を呈する。

SD-257 (Fig-47)

1区3面中央部で検出された溝状遺構である。検出面の標高は2.70m前後で、博多遺跡の基盤層である黄褐色砂層面上で検出した。溝の主軸はN-15°-Eの方向を採る。溝の幅は1.10~1.40mを測り、断面形は逆台形を呈する。検出面から溝底面までは40cm前後の深さを測り、埋土は暗褐色砂である。

出土遺物をFig-46に示した。

317は須恵器蓋の摘み部片である。318・319は須恵器碗である。 復元口径は14.0cm、16.2cmを測り、いずれも焼成は良好で、 色調は灰色を呈する。320は須恵器蓋坏である。復元口径 14.2cmを測る。321は灰釉陶器の皿である。322は土師器埦の 高台部片である。323は緑釉陶器碗である。高台径は7.6cmを 測り、釉調は暗緑灰色を呈する。324は須恵器碗である。高台 径は9.4cmを測り、高台の断面形はほぼ方形を呈する。

出土遺物より、溝の年代は7世紀後半から8世紀初頭の時期 が考えられる。



Ph. 35 SD-257完掘状況(南から)

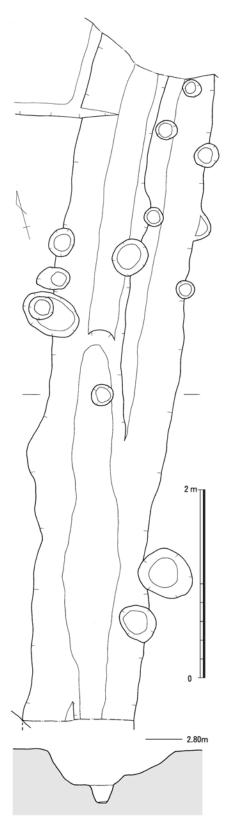


Fig. 47 SD-257実測図(S=1/40)

4. その他の出土遺物

これまで触れられなかった遺物のうち、重要と思われるものについて遺構出土遺物・包含層出土遺物にわけて簡単に説明を行う。

a. 遺構出土遺物 (Fig. 48 · 49)

325~368までは前項において報告できなかった遺構より出土した遺物である。各遺構の時期を検討する上で重要と思われる遺物などを示した。出土遺構は図中に示した。

325は白磁平底皿である。326は白磁碗である。327・328は白磁高台付皿である。328は玉縁状口縁 を呈する。329は青白磁合子の蓋である。330は同安窯系青磁碗である。内外器面に櫛描文が施される。 331は白磁平底皿である。332は白磁高台付皿である。重ね焼きのために内面見込み周囲は輪状に釉が 剥ぎ取られる。333は白磁口禿皿である。334は龍泉窯系青磁坏である。釉調は明オリーブ色で、畳付 きのみ露胎とする。335・336・337は白磁碗である。338は中国陶器皿である。339は青白磁合子身で ある。340は白磁小碗である。341は白磁平底皿である。342・343は白磁高台付皿である。344は白磁 平底皿である。345は軒丸瓦である。346は龍泉窯系青磁平底皿である。内面見込みには片切彫りで草 花文が施される。347は須恵器碗である。高台の断面形は方形を呈する。348は白磁碗である。349は 白磁鉢である。350は白磁小壺蓋である。351は須恵器甕である。352は瓦器椀である。外器面は横位 のヘラ磨きが施され、内器面は斜格子状のヘラ磨きを施している。353は白磁小碗である。354は白磁 碗である。内器面には櫛描による雲文を施す。355は白磁鉢である。火災などによる被熱により釉は 溶け落ちる。356は須恵器壺である。357は土師器高台付皿である。坏部はヘラ切りされ、高台が貼り 付けられる。色調は褐色を呈する。358は瓦器椀である。底部はやや丸味を帯び、高台は断面形が方 形を呈する。色調は黒灰色を呈する。359は青白磁小碗である。内面には片切彫りと櫛描文による装 飾が施される。360・361は白磁碗である。360は玉縁碗で、361は見込み周囲の釉を輪状に剥ぎ取る。 362は土師器蓋である。胎土は精緻で、色調は橙色を呈する。363は瓦器小皿である。底部は糸切りさ れ、板目圧痕が残る。ヘラ磨きは内外器面共に横位に施される。364・365は須恵器碗である。366は 白磁平底皿である。367は須恵器坩である。368は白磁玉縁碗である。高台部付近にはヘラナデの痕跡 が残る。

b. 包含層出土遺物 (Fig. 50~53)

369~480までは遺構検出・遺構面掘り下げ時・包含層などから出土した遺物である。各遺構面・包含層の年代観を考える上で重要と思われる遺物などを示した。出土地点は図中に示した。

369~371は土師器坏である。いずれも底部はヘラ切り調整される。369には板目圧痕が残る。372は中国陶器小壺である。373~376は須恵器碗である。377・378は瓦器椀である。いずれも内器面口縁部下には沈線が巡り、丁寧なヘラ磨きが施される。378の外器面は指頭圧痕が残る。

379は東播系須恵器碗である。380~384・386は須恵器蓋である。385は須恵器蓋坏である。口縁部はやや内傾する。胎土は精緻で、色調は濃灰色を呈する。387・388は須恵器坏である。389は須恵器碗である。390は土師器小甕口縁部片である。391は瓦器小皿である。底部はヘラ切り調整される。色調は黒褐色を呈する。392は土師器甕口縁部片である。口唇部には段を有する。393は古式土師器壺頸部片である。器厚は薄く、胎土は石英・雲母片などの混入物が観察できる。色調は暗褐色を呈する。394は古式土師器二重口縁壺頸部片である。395~398は土師器甕である。395は外器面に縦位の刷毛目調整が施され、口縁部下には煤が付着する。口縁部内器面には斜位の細かい刷毛目調整が施される。396の口縁部はナデ調整によって面取りされる。

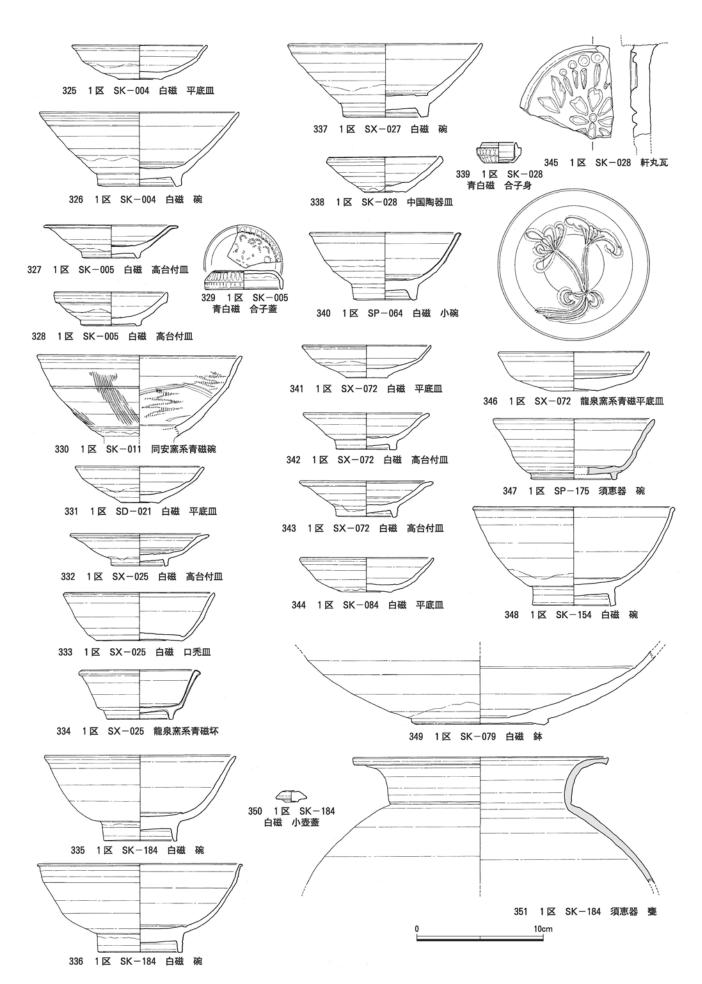


Fig. 48 その他の出土遺物 1 (S=1/3)

399~408・412・415は白磁平底皿である。409~411・413・418・419は白磁高台付皿である。

414・416・417は白磁口禿皿である。420~437は白磁碗である。420~424は玉縁碗で、428~431の内器面には櫛描文が施される。430・431の外器面には調整具突端部による条線が全周に施される。

438は龍泉窯系青磁坏で、畳付きのみ露胎とする。釉調は明オリーブ色を呈する。439・441・442は龍泉窯系青磁碗である。441・442の内器面には片切彫りによる装飾が施される。440は龍泉窯系青磁東口碗である。外器面には鎬蓮弁文が施される。釉調は暗オリーブ色を呈する。443・444・450は龍泉窯系青磁平底皿である。443・444の内面見込みには片切彫りによる魚文が施される。450は草花文が施される。445は青白磁皿である。内面見込みに櫛描文が施される。446・447は青白磁小壺である。口縁部はいずれも露胎とする。448は龍泉窯系青磁平底皿である。畳付きのみ露胎とし、高台内まで施釉する。釉調は明青緑色を呈する。449・451は同安窯系青磁平底皿である。452は青白磁平底皿である。453・454・456は青白磁小壺である。453は口唇部付近の釉を拭き取り口禿とし、外器面には鎬蓮弁文を施す。455は青白磁深碗である。外器面には片切彫りによる斜格子状の模様を施す。口縁部は口禿となる。457は白磁蕉葉文鉢である。口唇部は釉が拭き取られ口禿となる。外器面には櫛描文と片切彫りによる蕉葉文が施される。458~461・463~468は青白磁合子蓋である。口縁部付近から内器面中位まではいずれも露胎とする。462は青白磁蓋である。469は青白磁合子身である。

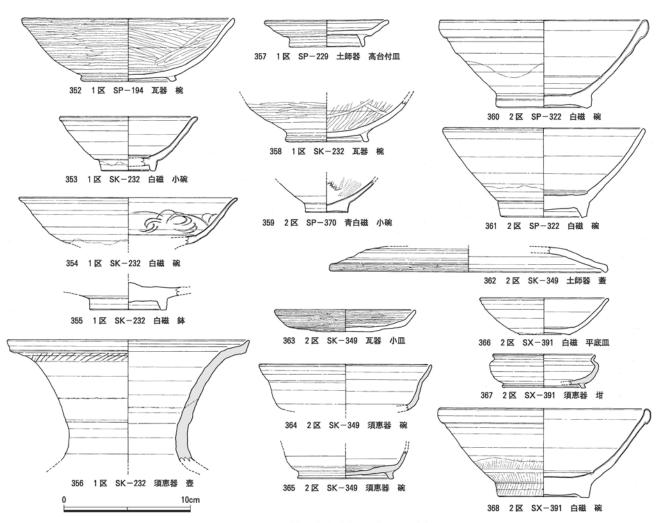


Fig. 49 その他の出土遺物 2 (S=1/3)

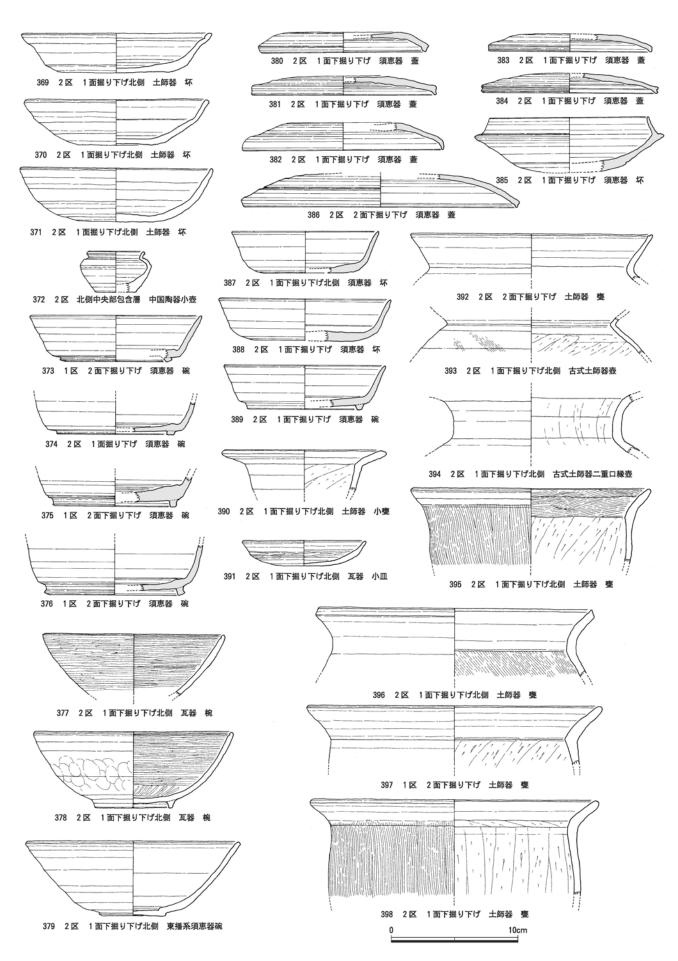


Fig. 50 その他の出土遺物 3 (S=1/3)

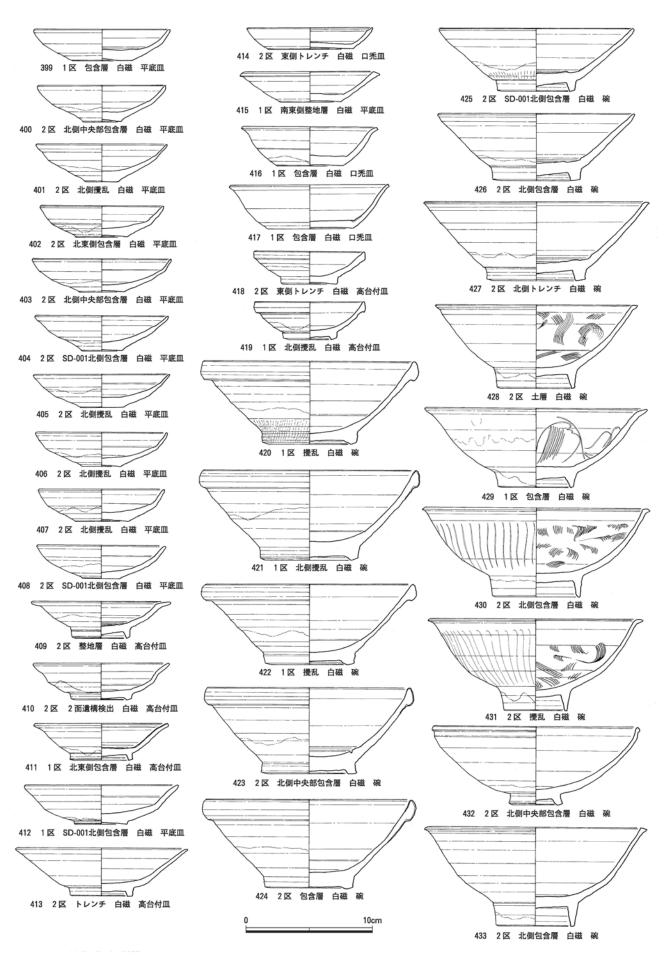


Fig. 51 その他の出土遺物 4 (S=1/3)

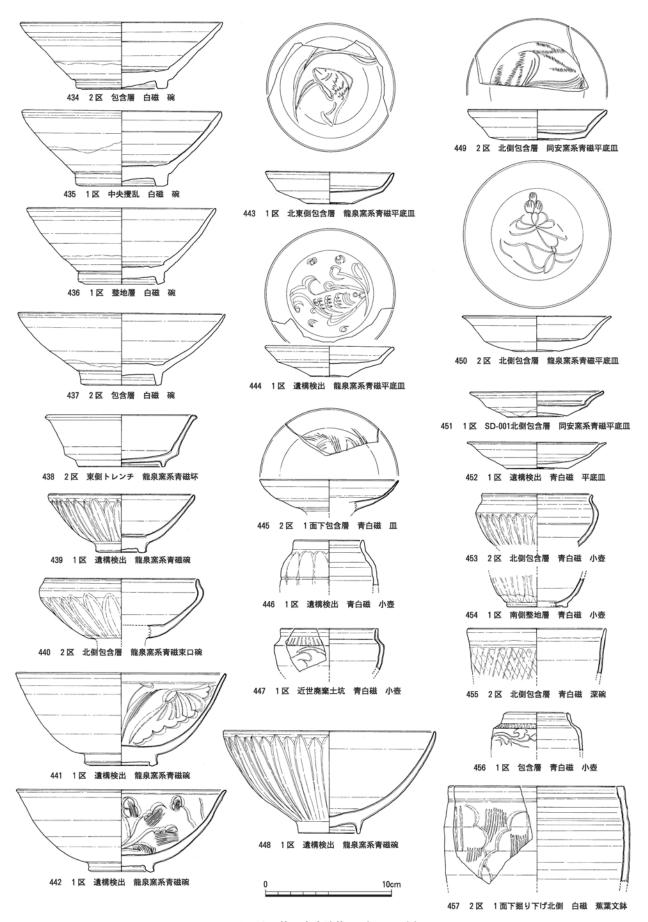


Fig. 52 その他の出土遺物 5 (S=1/3)

470・471は土師器灯明皿である。472は中国陶器皿である。473~475は天目茶碗である。476は中国陶器灯火器か。477は砥石である。478・479は軒平瓦である。480は軒丸瓦である。

c. 銅銭 (Fig. 54 • 55)

第138次調査では、総数58枚の銅銭が出土している。その中でもSD-001東側整地層掘り下げ時には整地層中から22枚の銅銭が出土したが、その内の10枚は緡の状態で出土した。出土状態を記録するため、写真撮影を行い、福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏の協力で複製を作成した。複製後に錆落とし・判読を行った。

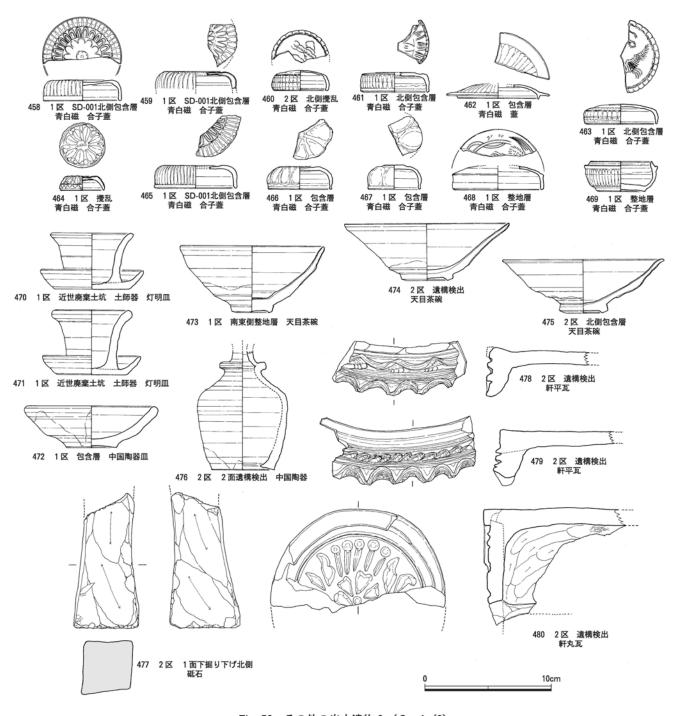


Fig. 53 その他の出土遺物 6 (S=1/3)



1区 包含層 祥符元寳



1区 1面上包含層 景徳元寶





1区 1面上包含層 天聖元寶



1区 1面上包含層 景祐元寳



1区 1面上包含層 祥符元寶

SD-001東側整地層

開元通寳



1区 SX-050

咸平元寳

SD-001東側整地層 嘉祐元寳



1区 SK-081 熈寧元寶



1区 SP-036 元豊通寳



SD-001東側整地層

皇宗通寶

SD-001東側整地層 元豊通寳



SD-001東側整地層 元豊通寳



SD-001東側整地層 元豊通寳



1区 1面上包含層 元祐通寳



1区 1面上包含層 元祐通寶



2区 SK-343 紹聖元寶



1区 北東側近世攪乱 元符通寳



2区 包含層 崇寧重寶

Fig. 54 銅 銭



1区 1面上包含層 大観通寶



1区 1面上包含層 寛永通寶



1区 1面上包含層 寛永通寶



1区 1面上包含層 寛永通寳



1区 1面上包含層 寛永通寶



1 区 1 面上包含層 寛永通寶



1区 1面上包含層 寛永通寶



2 区 包含層 寛永通寶

Fig. 55 銅 銭

銭貨名	西暦	王朝名	初鋳年	枚数	銭貨名	西暦	王朝名	初鋳年	枚数
開元通寳	621	唐	武徳4年	3	紹聖元寶	1094	北宋	紹聖元年	2
至道元寶	995	北宋	至道元年	1	元符通寳	1098	北宋	元符元年	2
咸平元寶	998	北宋	咸平元年	1	聖宋通寶	1101	北宋	建中靖国元年	1
景徳元寳	1004	北宋	景徳元年	2	崇寧重寶	1103	北宋	崇寧2年	1
祥符元寳	1009	北宋	大中祥符元年	3	大観通寳	1107	北宋	大観元年	1
天禧通寳	1017	北宋	天禧元年	1	寛永通寳	1636		寛永3年	8
天聖元寳	1023	北宋	天聖元年	4	(崇)ヵ寧通寳				1
景祐元寳	1034	北宋	景祐元年	1	()(元)ヵ(元)ヵ寳				1
皇宗通寳	1038	北宋	寛元元年	3	()祐通寳				1
至和通賓	1054	北宋	至和元年	1	()()通(寳)ヵ				1
嘉祐元寳	1056	北宋	嘉祐元年	1	(嘉)ヵ祐(通)ヵ寳				1
熈寧元寳	1068	北宋	熈寧元年	1	元(豊)ヵ通寳				1
元豊通寳	1078	北宋	元豊元年	5	解読不能				7
元祐通寳	1086	北宋	元祐元年	3	総数				58

Tab. 1 西曆別出土銅銭一覧表

区	面	遺構	番号	出土地点	銭名	枚数	備考	区	面	遺構	番号	出土地点	銭名	枚数	備考
1区	1面	SD	006	東西溝	天聖元寶	1		1区	1面			CD 001車側軟体屋	解読不能	1	
1区	1面	SP	036		元豊通寳	1		1区	1面			SD-001東側整地層 (暗褐色砂質土層)	至道元寶	1	
1区	1面	SK	037		天聖元寳	1		1区	1面			(咱钩巴砂貝工階)	天豊通寳	1	
1区	1面	SX	050		咸平元寳	1		1区	1面			包含層(整地層)	祥符元寶	1	
1区	1面	SX	050		(崇)ヵ寧通寳	1	当十銭	1区	1面上				元祐通寳	2	
1区	1面	SX	050		()(元)ヵ(元)ヵ寳	1		1区	1面上				寛永通寳	7	
1区	1面	SX	050		開元通寳	1		1区	1面上				景徳元寳	1	
1区	1面	SX	050		()祐通寳	1		1区	1面上				大観通寶	1	
1区	1面	SK	081		熈寧元寳	1		1区	1面上				景祐元寶	1	
1区	1面			北東側近世廃棄土坑	元符通實	1	折二銭	1区	1面上				祥符元實	1	
1区	1面				嘉祐元寳	1		1区	1面上			包含層掘り下げ	天禧通賓	1	
1区	1面				元豊通寳	3	3枚の内2枚連	1区	1面上				天聖元寶	1	
1区	1面				皇宗通寳	2		1区	1面上				皇宗通寳	1	
1区	1面				開元通實	1		1区	1面上				祥符元實	1	
1区	1面				聖宋通賓	1		1区	1面上				(嘉)ヵ祐(通)ヵ寳	1	
1区	1面			SD-001東側整地層	()()通(寳)ヵ	1		2区	1面	SK	343		紹聖元寶	1	
1区	1面			(暗褐色砂質土層)	解読不能	3		2区	1面	SK	343		元(豊)ヵ通寳	1	
1区	1面				紹聖元寶	1		2区	1面			包含層カクラン掘り下げ	寛永通寳	1	
1区	1面				天聖元寳	1		2区	2面上			北側中央部包含層	解読不能	1	
1区	1面				天祐通寳	1		2区	2面上			北側包含層掘り下げ	開元通寳	1	
1区	1面				元符通寳	1		2区	2面上			包含層掘り下げ	崇寧重實	1	当十銭
1区	1面				至和通寳	1									
1区	1面				景徳元寶	1							出土総数	58	

Tab. 2 遺構別出土銅銭一覧表

d. 墨書土器 (Fig. 56 • 57)

481~518は墨書土器である。本調査では総数37点の墨書土器が出土した。明瞭に判読できない資料については、福岡市埋蔵文化財センターにおいて赤外線カメラを使用して判読を試みたが、遺構埋土中の鉄分等が土器胎土に沈着したものが多く、判読できたものは少ない。紙面の都合上、各遺構から出土した遺物についても一括して報告を行う。

481は土師器坏である。SX-050より出土した。底部は糸切りされる。内面見込み・側面・外器面・底面それぞれに神馬四頭が墨書で描かれる。外器面の馬は坏を逆位にした状態で描かれており、脚部付近が欠損する。絵馬に相当するものか。482は土師器坏である。SK-184より出土した。底部はヘラ切り調整される。内面見込みには放射状に真言が四行墨書される。まじないに使用されたものと考えられる。483は土師器小皿である。底部は糸切りされ、底面に「三□」と墨書される。

484は白磁高台付皿である。花押の一部と考えられる墨書が残る。485・486は白磁碗である。共に高台内に墨書が残る。487は土師器埦である。高台内に墨書されるが、判読できなかった。

488・489はSD-006より出土した白磁平底皿である。ともに底面の露胎部に墨書される。

490はSK-184より出土した白磁碗である。高台内に「林聚」の墨書が残る。

491・492は白磁平底皿である。491はSK-178より出土した。底面に墨書が残る。492はSD-006より出土した。底面に「永□」の墨書が残る。内面見込みには片切彫りによる装飾が施される。

493はSK-065より出土した白磁玉縁碗で、高台内に「十」と墨書される。494はSK-184より出土した白磁碗である。高台内に「沐□」と墨書される。495は中国陶器盤である。底面に墨書されるが断片資料であり、判読できない。

496は白磁小碗である。高台内に「荘」の墨書が残る。497は白磁碗である。高台内に花押と見られる墨書が残る。498は白磁高台付皿である。高台内に墨書されるが、判読できない。

499は白磁碗である。高台内に墨書が残る。500は龍泉窯系青磁碗である。外器面には片切彫りによる線刻が施される。高台内に「十」の墨書が残る。501は白磁碗である。「三□」の墨書が高台内に残る。502は白磁平底皿である。底面に墨書が残るが判読できない。503は白磁碗である。花押と見られる墨書が残る。504は同安窯系青磁碗である。高台内に墨書の一部が残るが判読できない。

505は土師器坏である。底面に墨書の一部が残り、「竹」と読める。

506・507は白磁碗である。506は高台内にわずかに墨書が残るが、判読できない。花押か。507は欠損のため、「丁」だけが判読できる。508は中国陶器捏鉢である。外器面に墨書が残る。

509はSK-346より出土した白磁碗である。外器面の露胎部分に墨書される。内面見込み周囲の釉は 剥ぎ取られる。510は白磁平底皿である。底面に墨書される。511は中国陶器壺である。

512・513は白磁高台付皿である。512は高台内に墨書される。花押か。513も高台内に墨書されるが、 遺存状態が悪く判読できない。514は糸切りの土師器坏である。外器面には墨書で条線が施される。 515は龍泉窯系青磁碗である。見込みには片切彫りで雲文を施し、高台内に「二綱」と墨書する。

516は糸切りの土師器坏である。内器面には習字と見られる墨書が残り、同じく底面にも習字の墨書が残る。517はSK-351より出土した龍泉窯系青磁碗である。高台内に花押が墨書される。

518は白磁碗である。高台内に「九綱」と墨書される。

以上、37点の墨書土器について報告を行った。整理作業段階ではこの他にも墨書と見られる土器片が数点あったが、福岡市埋蔵文化財センターで判読を試みたところ、火襷であることが判明した。報告を行った墨書の中で注目されるものは481の神馬を描いた墨書土器、482の墨書土器である。中世の民間信仰・呪いを考える上で貴重な資料と言えよう。

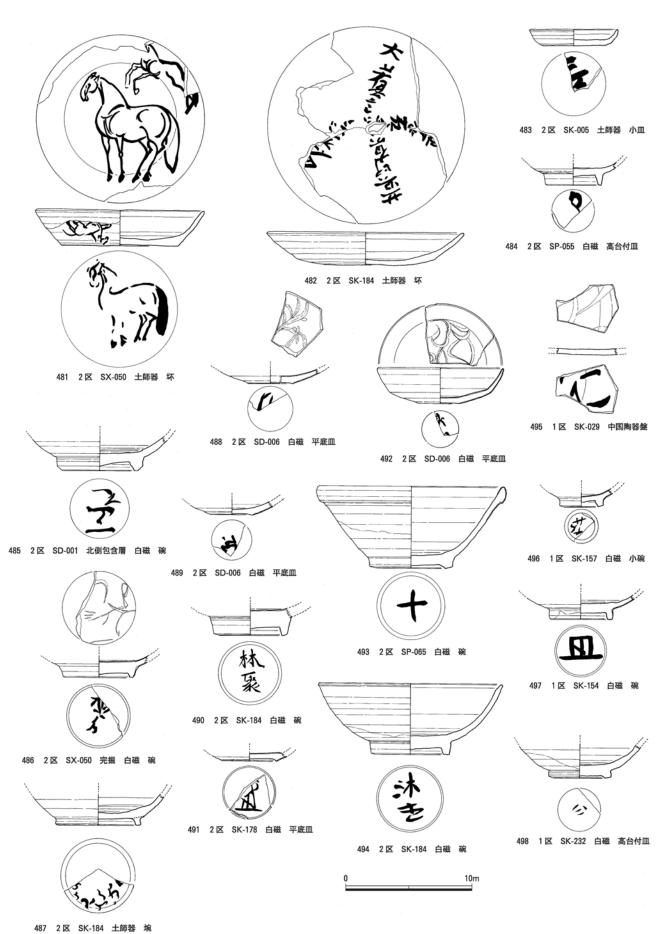


Fig. 56 墨書土器実測図 1 (S=1/3)

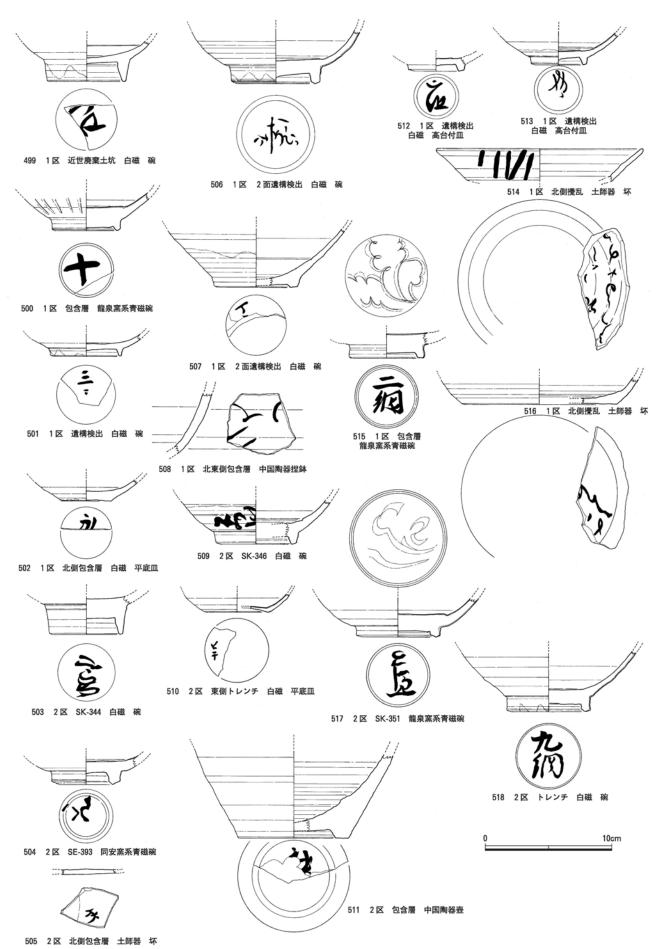


Fig. 57 墨書土器実測図 2 (S=1/3)

第三章 まとめ

以上簡単ではあるが、検出遺構面、出土遺物についての説明を行ってきた。最後に第138次調査の 簡単なまとめと、周辺の調査成果から推測できる景観復元を行いたい。

本調査地点での遺構の初現は古墳時代初頭である。検出された遺構は竪穴住居1軒のみであるが、近辺の調査成果より一帯に広範囲な集落が展開していたことが推測される。東側に位置する第24次調査地点では弥生時代中期の甕棺墓が検出されている。本調査区では大型甕の口縁部片が出土しているが、弥生時代に属する遺構は検出されなかった。

以後しばらく遺構の見られない期間の後、8世紀代になり南北方向よりやや東に振れた主軸方向の溝(SD-257)によって区画された遺構群が出現する。8世紀代後半になると、東西・南北方向の主軸を採る計画性を持った区画溝(SD-174・186)に画された空間に建物施設が造営される。これらの区画溝は博多浜一帯の調査区においても検出されており、出土遺物などから博多浜南部域には律令官人に伴う官衙関連施設の存在が推測されている。この時期は砂丘地形の人為的な改変にはあまり積極的ではなく、地形改変は小規模なものに留まり、傾斜面などの自然地形を利用した施設の配置が想定される。本調査区においては、区画溝の南北の高低差を残したままで、北側の低位面に展開する建物施設群の存在が認められた。

中世前期には砂丘鞍部がある程度風成砂などの堆積によって埋まり、平面的に居住域の拡大が開始される。本調査区では12世紀代はじめの廃棄土坑が集中して検出されており、北側に位置する第105次調査地点と同様に、集落周囲の低位面を廃棄場所として選定・使用していたことが伺える。

12世紀前半代には集落・居住域の拡大に伴って、黄褐色土などを用いた整地層による埋め立てが開始される。この時期には博多浜と息浜を結ぶ陸橋部の埋め立ても行われるなど著しく博多遺跡群内の開発が進み居住域が拡大する。本調査区一帯も北側方向の低位面を埋め立てるように整地作業を行い、使用可能な空間が十分に確保された中世中頃以降には東西・南北方向の区画溝によって画された屋敷地が展開する。この区画溝は、8世紀代に初源を持つ区画溝の規格性を踏襲しほぼ同じ主軸方向を採るが、わずかに位置を変えて掘り直しを行い存続している。8世紀以降から16世紀末に行われた太閤町割り直前まで町筋がほとんど変化していなかったことが伺える。本調査区では丁寧な整地を行いながらも、井戸等の生活遺構はわずかにしか検出されておらず、ある程度用途の限定された空間であったことが推測できる。また、SX-050上層などの土師器一括廃棄遺構の廃棄状況からは、溝の南側に建物が存在することも推測された。調査区南西側付近は鎮西探題の存在が推測される地点であり、本調査で検出された14世紀代の溝や土坑などの廃棄遺構もこれに関連する遺構である可能性が考えられる。

周辺の調査成果において指摘されていることであるが、本調査地点においても中世後半期以降の遺構は溝以外検出されておらず、該期には耕作地として使用されていたことが推定される。都市としての「博多」の中心は遺跡群の北東側の息浜に移動しており、調査区付近は閑散とした景観であったことが推測される。

以上、本調査の簡単なまとめを行った。以下では検出された遺構と周辺の調査成果を基に調査区一帯 の景観復元を試みたい。

(1) 中世以前の遺構について

弥生時代の遺構は本調査では検出されておらず、大型甕の口縁部片が出土したのみである。甕棺墓に使用された甕の一部と考えられるが、遺構としては残存していない。調査区東側に近接する第4次・第24次・第32次調査では弥生時代中期の甕棺墓や大型甕の破片が出土しており、砂丘西側から縁辺部にかけて墓域が複数存在していたことが推定できる。西側に隣接する調査区では、この時期に属する遺物は出土しているが、墓域の存在を示す遺構は検出されておらず、一つの墓域の西端部に位置するものと考えられる。これらの墓域を営んだとされる集落は、本調査区の東側200m付近に位置する第30次調査地点周辺の砂丘頂部一帯に展開することが知られている。

古墳時代に属する遺構は竪穴住居1軒のみの検出であったが、調査区東側に位置する第24次調査地点では4世紀代の方形周溝(SD-01方形周溝墓か?)の一部が検出され、第4次調査においても該期の遺物が出土、また南東側に位置する第36次調査では同時期の住居群が検出されており、一帯は広範囲な集落の一部として取り込まれていたことが伺える。

古代の遺構としては、SD-174・184・255・257等が検出された。8世代後半の時期と考えられる SD-174・186は調査区をほぼ東西方向に横断する溝でこの溝に方向を規制された堀立柱建物群を伴って検出される。隣接する第127次調査においても一連の溝と考えられるM85が検出されており、この溝遺構は数回の掘り直しが行われ、古代後半から中世前半まで存続している。また、これらの溝の延長方向には14世紀代に廃棄された第4次調査のM2、第67次調査のSD-01等の溝が存在しており、古代以来中世後半期まで続いた区画溝であることが分かる。SD-255・257はこれらの溝の前段階に掘削された溝であり、東西・南北方向よりやや東に振れる主軸を持つ。近接する調査区では同方向の溝の検出はなく、規模・用途は不明であるが古代における区画の変遷を示す資料として注目される。

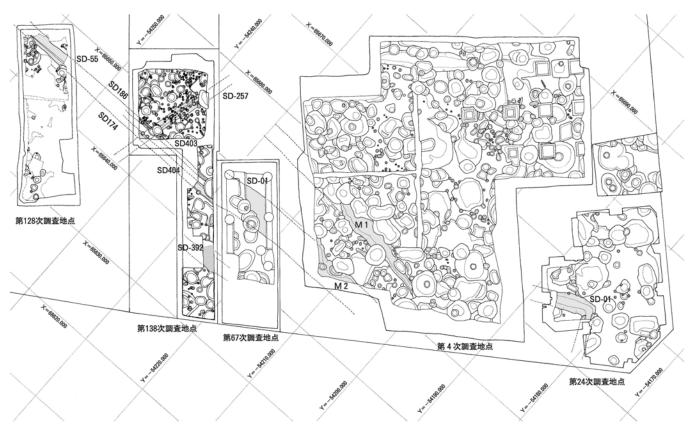


Fig. 58 周辺遺構位置図・古代(S=1/500)

(2) 中世の景観

中世前半期の調査地点付近は、古代以降存続する溝遺構が引き続き主要な区画として存続している。 近接する地下鉄工事に伴う調査区においても8世紀代から14世紀代まで存続する区画溝が複数検出されている。本調査で検出された該期の溝は、これらの溝の延長線上には位置していないが基幹となる 溝(I区1号溝、A・B区5号溝など)が方一町の区画をなしていることから、本調査区で検出され

た区画溝は比較的小規模な区画を示すものであることが分かる。しかしながら、ほぼ同時期に存続する溝の間隔は5 m前後と狭く、その用途・性格は単なる区画溝とは考えられず、これに伴う建物施設などとの関連性を含めて今後の検討を要する課題である。

中世中頃から後半期の博多遺跡群全体の景観は、これまでの調査で検出された道路遺構を基に復元が行われている。調査区付近は中世後半には耕作地として利用されていることが調査成果より知られており閑散とした景観が推測される。本調査では中世後半期に属する遺構の検出はわずかで、SD-051が該期の景観を示す。この溝は東側に隣接する第4次調査で検出された溝遺構M4と一連の溝遺構と考えられる。この溝は現在の街区とほぼ同一方向を採るが、出土遺物より太閤町割り以前の年代が考えられる。耕作地を区画した用水溝と考えられる。

近世になり調査区では、全面的な整地が再び行われ、廃棄土坑などの遺構が見られるようになる。古図に見られる寺前町として生活領域に取り込まれたことが伺える。



Ph. 36 出土遺物 青白磁

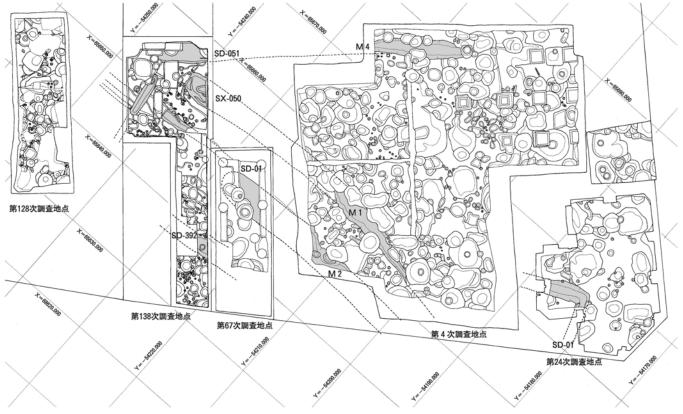
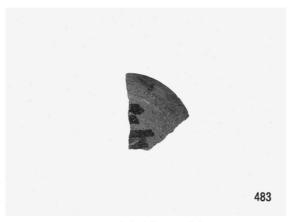


Fig. 59 周辺遺構位置図・中世(S=1/500)



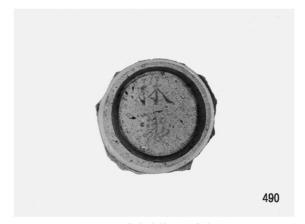
Ph. 37 出土遺物 墨書土器



Ph. 38 出土遺物 墨書土器



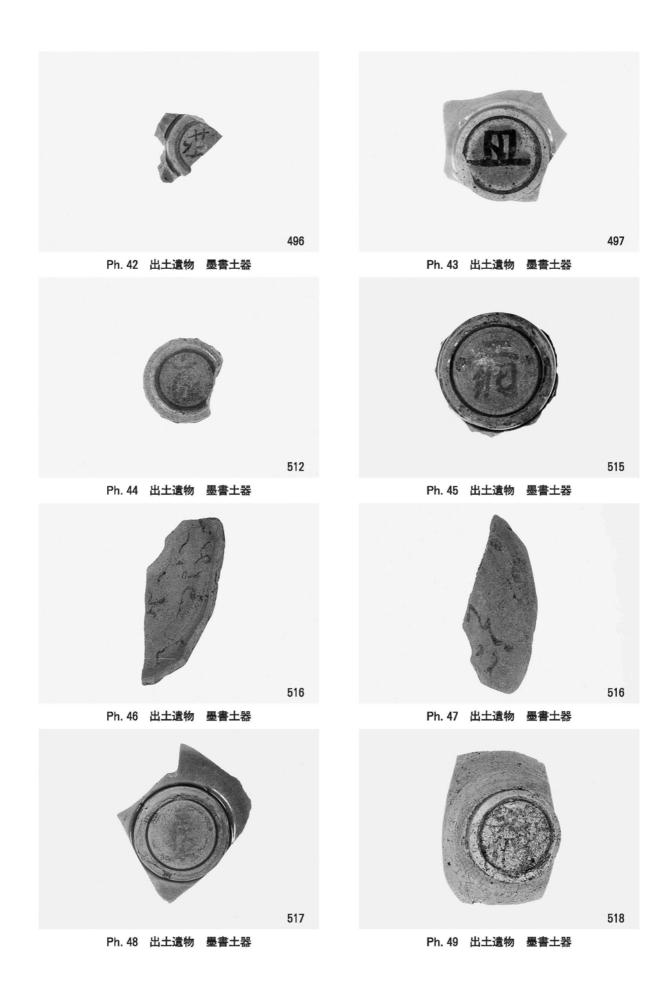
Ph. 40 出土遺物 墨書土器



Ph. 39 出土遺物 墨書土器



Ph. 41 出土遺物 墨書土器



	. N. N. S							
書 名	博多97 (はかた97)							
副 書 名	博多遺跡群第138次調査報告							
巻 次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第806集							
編集者名	本田浩二郎							
発 行 機 関	福岡市教育委員会							
所 在 地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2004 (平成16) 年 3 月31日							
調査期間	2002. 06. 03~2002. 08. 23							
調査面積	271.85 m²							
調査原因	共同住宅建設							
所収遺跡名	博多遺跡群 (はかたいせきぐん)							
所 在 地	福岡県福岡市博多区冷泉町35・36・37							
市町村コード	40132	遺跡番号	0 1 2 0					
北緯	33° 35′ 25″	東 経	130° 25′ 01″					
種 別	集 落	主な時代	古墳/古代/中世					
主な遺構	竪穴住居1/土坑/溝20/井戸3/柱穴							
主な遺物	弥生土器/古式土師器/土師器/須恵器/貿易陶磁器/国産陶器/銅銭など							
特記事項								

博多97

福岡市埋蔵文化財調査報告書第806集 博多遺跡群第138次調査報告書 2004年3月31日発行

> 発行 福岡市教育委員会 印刷 衛大進印刷

